



TITLE:

遊離数量詞に反映される認知ストラテジー

AUTHOR(S):

尾谷, 昌則

CITATION:

尾谷, 昌則. 遊離数量詞に反映される認知ストラテジー. 言語科学論集
2000, 6: 61-101

ISSUE DATE:

2000-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/66952>

RIGHT:

遊離数量詞に反映される認知ストラテジー*

尾谷 昌則

京都大学

HZT05753@nifty.ne.jp

1. はじめに

本稿では、いわゆる数量詞遊離 (Quantifier Floating) と呼ばれる現象を扱う。これは、例えば(1)のように、「三匹」のような数量を表す語を用いた文が三種類の語順を許すことから、多くの研究者の注目を集めてきた問題である。(1a.)は連体助詞の「の」を伴って直後の名詞を修飾する場合であり、(1b.)は主語である「子豚が」の直後に「三匹」という名詞だけが独立した形で出現している。本稿では、加藤 (1997) に倣ってそれぞれ前者を連体数量詞、後者を遊離数量詞と呼ぶことにする。¹ また(1c.)のように、名詞句の直後に並置されている数量詞を、本稿では同格数量詞と呼ぶことにする。

- (1) a. 三匹の子豚がいました。 <連体数量詞>
- b. 子豚が三匹いました。 <遊離数量詞>
- c. 子豚三匹がいました。 <同格数量詞>

問題となるのは、連体格や同格の場合ではなく、(1b.)のように数量詞が格助詞を伴わずに出現している場合である。このような場所に生起する数量詞を説明するために、生成文法による先行研究では移動分析を行っている場合が多いのだが、本稿ではそのような分析法はとらず、いわゆる数量詞遊離と呼ばれてきた現象を認知文法の枠組みから捉え直す。そして遊離数量詞とは Langacker (1984, 1990) が提唱している active-zone (活性領域) を言語によって明示化した要素であると主張すると共に、遊離数量詞が sequential scanning (連続的認知) の認知プロセスを反映する要素であると論じる。

2. 先行研究

2.1. 連体数量詞文からの移動分析

先行研究は、移動を認める立場と認めない立場の2つに大別される。移動を認める先行研究はさらに2つに大別され、1つは神尾(1977)のように連体数量詞文から遊離数量詞文を派生させる分析であり、もう1つは奥津(1969, 1996a, 1996b.)のように同格数量詞文から遊離数量詞文を派生させるものである。そこでまずは神尾(1977)に代表される移動分析について検討してみよう。総括すると神尾(*ibid.*)は(2a.)のような連体数量詞文から移動変形によって(2b.)の遊離数量詞文

* 本稿は、1999年に京都大学で開催された第2回認知言語学フォーラムにおけるワークショップで口頭発表したものに加筆・修正を加えたものである。言うまでもなく、本稿における不備は全て筆者の責任である。

¹ (1b.)の「三匹」を遊離数量詞と呼ぶのは、多くの先行研究において(1a.)のような連体数量詞「三匹の」が遊離(float)して後方に移動することによって(1b.)のような構造が派生するとされてきたからであって、本稿の研究も加藤(1997)も移動による分析を支持しているわけではない。本稿では、連体格や同格以外の位置で用いられている数量詞を全般的に遊離数量詞と呼ぶことにする。

が派生すると主張している。

- (2) a. 私は二百枚の年賀葉書を郵便局で買った。
b. 私は年賀葉書を郵便局で二百枚買った。

しかし、井上(1978)や国広(1980)をはじめとする様々な先行研究ですでに指摘されているように、移動する前と移動した後では、意味にズレが生じてしまう場合が存在する。²

- (3) a. 私は昨日会った数人の学生を招待した。
b. 私は昨日会った学生を数人招待した。 井上 (1978)
(4) a. 十段の階段をのぼる。
b. 階段を十段のぼる。 国広 (1980)

普通ならば、(3a.)の文を聞いたときの解釈としては、「昨日会った学生」が数人であり、その学生達を全て招待したというものであろうが、(3b.)の解釈としては、「昨日会った学生」が数人以上いて、そのうち数人だけを招待したというのが無標の解釈であろう。このような解釈に関して、前者を<全体読み>、後者を<部分読み>と呼ぶことにする。(4a.)(4b.)の文も同様で、総数が十段の階段を上るのか(全体読み)、それとも十段以上ある階段を十段だけ上るのか(部分読み)という解釈に違いが生じてしまう。³ ゆえに、連体数量詞文と遊離数量詞文を派生で関連づける分析には疑問が残る。

さらに言えば、<全体読み>が優勢である(4a.)の文では、階段の総数(つまり「全体」)が十段ということが明示されているが、それを何段目までのぼるのか(つまり「部分」)が明示されていない。それに対して、<部分読み>の解釈を受ける(4b.)では、階段の総数(「全体」)は不明ではあるが、実際にのぼる階段の数(「部分」)が十段ということは明示されている。これは、連体数量詞と遊離数量詞がそれぞれ全く別の側面を描写していることを示唆するものである。⁴ よって、この2つを同時に用いても余剰性は生じないはずであり、実際(5a.,b.)のように連体数量詞と遊離数量詞を共起させることもできる。

- (5) 十段の階段を五段のぼる。

となれば、連体数量詞と遊離数量詞はそれぞれ機能が根本的に異なるということは明白であり、これら2つを移動規則によって関連づけることが尚さら困難となる。その上、(5)のように両方の数量詞が共起することも可能なので、連体数量詞が遊離数量詞の位置へ移動したと考えることは不可能になる。移動元と移動先の両方に数量詞が存在するはずがないからである。以上のような点から考えて、連体数量詞文から遊離数量詞文が派生すると考えるのは困難である。

2.2. 同格数量詞文からの移動分析

それでは、次に奥津(1969, 1996a., 1996b.)の分析を見てみよう。奥津も遊離数量詞は移動の結果であると論じているのだが、他の移動分析と異なっているのは、連体数量詞文からの移動で

² 一般に、移動によって数量詞の意味にズレが生じるのは、定名詞句からの移動であると指摘されている。

³ 連体数量詞から遊離数量詞への移動によって文の意味に違いが生じるのは、数量詞と被修飾名詞の線形的順序(語順)が入れ替わることによって<参照点>と<ターゲット>の関係に違いが生じるためと思われる。

⁴ この点については、3.2.面ですく見ることにする。

はなく, (6a.)のような同格数量詞文からの移動によって(6b.)の遊離数量詞文が生成されると主張している点である。

- (6) a. 昔ある所に【子豚三匹】が住んでいました。
 b. 昔ある所に【子豚】が【三匹】が住んでいました。 奥津(1996a:113)

ただし, このような移動は無条件に可能というわけではなく, 奥津は数量詞が定であればそれを移動させることはできないという制約を設けている。たとえば次の例文(7)においては, 前文脈で子豚が三匹いることが示されており, 「三匹」は定の数量詞ということになるので, それを移動させた(7b.)の方は非文になってしまうのだと奥津は指摘している。ただしこの場合は, (8)のように数量詞を「三匹とも」にするか, もしくは「全部」にすれば容認文になる。

- (7) 昔ある所に三匹の子豚が住んでいました。
 a. ところがある日, その子豚三匹が狼に食われてしまいました。
 b. *ところがある日, その子豚が三匹狼に食われてしまいました。
 (8) 昔ある所に三匹の子豚が住んでいました。ところがある日, その子豚が【三匹とも／全部】狼に食われてしまいました。

ところが奥津(1969:48)では, 数量的表現の定義として「数詞(numeral)」と「助数詞(classifier)」の組み合わせであるとしているので, 助数詞のない「全部」や, 余分な語彙的要素を伴う「三匹とも」などは数量詞ではない, だから(8)のような文は反例にはならない, と奥津は述べるかもしれない。⁵ しかし意味的にはどれも同じく数量に関する表現であるのだから, これらを数量表現から排除する正当な理由が必要であろう。⁶ また, これらが遊離数量詞と同じ位置に生起することを, 同格数量詞文からの移動という方法とは別の方法で動機付ける必要もある。これらの点について奥津は何も触れてない。そもそも奥津が主張しているこのような制約は, 恣意的なものであって, なぜこのような制約が生じるのかについて何も説明がない。ただ単に, 移動によって非文になる場合を排除するために後知恵的に考え出したものであって, 目的はあっても原因のない制約である。

奥津は, 定の数量詞を移動させることはできないとの制約を設けてはいるが, 定の名詞句からの移動は可能であるとしている。ただしその場合は, 先行する被修飾名詞と数量詞の間にポーズを挿入して発話しなければ不自然に感じられることを奥津自身も認めており, それを「|」という目印で表している。たとえば下例(9)のような文脈においては, (9a.,b.)の名詞句「その子豚」は定であるが, 同格数量詞, 遊離数量詞どちらも容認文であるとしている。

- (9) 昔ある所に子豚が三匹住んでいました。
 a. ところがある日 その子豚|二匹 が狼に食われてしまいました。
 b. ところがある日 その子豚が 二匹 狼に食われてしまいました。 奥津(1996b.)

⁵ 加藤(1997:37)ではこの点を整理して, 「数詞+類別辞」のみを数量詞と呼び, 余分な語彙的要素を伴ったもの(例えば「三匹とも」や「20名以上」など)を「数量詞句」と呼んで区別している。

⁶ 高水(1999)では, 量や程度に言及する副詞を区別することに困れすぎると, それらが基づいている認知プロセスの共通性がかえって見えにくくなる恐れがあることを指摘した上で, それらを「量・程度表現」と呼んで多角的な考察を行っている。

しかし(9a.)の同格数量詞文は、(9b.)の遊離数量詞文と比べると、かなり座りの悪い文であることは明らかである。となれば、移動後の文は容認文であるのに、それが移動する前の基底構造文の方が容認度が落ちるというのは、移動分析の大きな問題となる。事実、基底構造であるはずの同格数量詞文の方が、遊離数量詞文よりも容認度が落ちるものが存在する。

- (10) a. 性欲にも、二つの種類があるのではないかと…… (安部公房「砂の女」: 258)
 b. ?性欲にも、種類二つがある……
 c. 性欲にも、種類が二つある……
 (11) a. ??裕子にはお父さん2人がいる。
 b. 裕子にはお父さんが2人いる。

このような場合、基底構造であるはずの同格数量詞文の容認度が落ちるので、移動分析の信憑性はますます怪しくなる。以上のような特定の数を表す数量詞だけではなく、(12)(13)のような不特定の数量を表す語彙を用いた場合はなおさら容認度の差がはっきりする。奥津にとっての数量表現の定義は先にも示した通り「数詞+数助詞(類別辞)」であるから、直接的に奥津分析の反例にはならないのであるが、形態的には異なっても意味的には同じ数量を表す語彙なのであるから、それらを分け隔てなく説明できる分析の方が望ましいことは言うまでもない。そのような分析方法の可能性については、5.4節で詳しく見ることにする。

- (12) a. *会場には人たくさんがいた。
 b. 会場には人がたくさんいた。
 (13) a. *喉が乾いたので、水少しを飲んだ。
 b. 喉が乾いたので、水を少し飲んだ。

最後に、2.1節でも触れた意味のズレについて見てみよう。連体数量詞は<全体読み>、遊離数量詞は<部分読み>であったが、同格数量詞はどうであろうか？ 以下の例文は、(a.)が同格数量詞文で、(b.)が遊離数量詞文であるが、2.1節で見た例文(3a.,b.)(4a.,b.)の場合とは違って、移動前と移動後の構文的な意味の差があまり感じられないようである。

- (14) a. 階段十段をのぼる。
 b. 階段を十段のぼる。

しかし以下の例では、同格数量詞である(15a.)は、<部分読み>よりも<全体読み>の方が優勢であるように感じられる。昨日会った学生が5人以上いて、その中から5人だけを招待したという可能性もあるが、昨日あった学生が5人であり、その5人を全て招待したという解釈の方が優勢ではないだろうか？ しかし遊離数量詞文の(15b.)にはそのような曖昧さは無く、会った学生は5人以上いたのだが、その中から5人だけを招待したという<部分読み>が優勢であろう。

- (15) a. 私は昨日会った学生5人を招待した。
 b. 私は昨日会った学生を5人招待した。

奥津の分析における移動は、2.1節で概観したような連体数量詞文からの移動とは異なり、名詞「学生」と数量詞「5人」の線形的な語順が入れ替わっていないので、意味のズレは最小限に

抑えられているのだと思われる。しかしそれでも同格数量詞文は、(15a.)からも分かるように、
 <部分読み>よりもむしろ<全体読み>が優勢であるのに対して、遊離数量詞は圧倒的に<部分
 読み>が優勢である。<部分読み>であることをはっきりさせるために「だけ」を付け加えてみ
 れば、面白いことが判明する。

(16) a. ?私は昨日会った学生5人だけを招待した。

b. 私は昨日会った学生を5人だけ招待した。

このようにすると、(16a.)の容認度が少し怪しくなる。もし全く問題ないとすれば、それは昨日
 会った5人の生徒以外にも知り合いの生徒はいるのだが、昨日会ったのは5人だけで、その5人
 を招待したという解釈の場合である。ゆえに同格数量詞は、やはり<全体読み>の方が優勢であ
 るということが浮き彫りになってくる。それに対して(16b.)では、<部分読み>を促す表現であ
 る「だけ」との相性が良いので、遊離数量詞は<部分読み>が優勢であることが分かる。⁷と
 なれば、同格数量詞と遊離数量詞は必ずしも同じ意味とは言えなくなるので、2.1節で見た場合
 と同様に、移動によって関連づけるのは不適切ということになる。

3. 数量詞をめぐる問題

3.1. 特定数量詞と不特定数量詞

多くの先行研究で数量詞とは何かということが厳密に定義されていないことを受けて、加藤
 (1997:33)は<特定数量詞>と<不特定数量詞>を区別している。以下の例文(17a.)(18a.)にある
 「250km」や「200g」は、ある具体的な数値を明示しており、類別辞を伴って用いられている。
 一方、(17b.)(18b.)の「かなり」や「たくさん」は、具体的な数値は明示されておらず、類別辞
 も伴っていない。本稿でも、前者を特定数量詞、後者を不特定数量詞と呼ぶことにし、これらを
 同じ数量詞として扱うことにする。

(17) a. 祐子は北陸自動車道を 250km 走り、休息をとった。

b. 祐子は北陸自動車道を かなり 走り、休息をとった。 加藤(1997:33)

(18) a. 義雄はひとりで牛肉を 200g 食べた。

b. 義雄はひとりで牛肉を たくさん 食べた。 加藤(1997:33)

不特定数量詞は、数量を客観的な具体的な数値で表しているわけではないが、一般に価値判断を
 含んでいるということは加藤(1997:33)も指摘している通りである。「牛肉を200g」と言っても、そ
 れが多いのか少ないのかという価値判断は含まれていないのに対して、「たくさん」と言えば量
 が多いという価値判断を含んでおり、「すこし」「ちょっと」といえば少ないという価値判断を含
 んでいる。⁸

3.2. 属性Qと数量Q

⁷ 両者がそれぞれ別の側面を描写しているのだから、以下のように、同格数量詞と遊離数量詞を共起させることも不可
 能ではない。ただし、連体数量詞の場合とは異なり、同格数量詞と遊離数量詞を共起させることができるケースは少な
 く、対比文脈にしなければ容認度は低いと思われる。

(i) 買ったケーキ5つを3つ食べて、残り2つは冷蔵庫に入れておいた。

⁸ 価値判断を含んでいるため、不特定数量詞は特定数量詞よりも副詞として解釈されやすい。この点に関しては5.4節
 で詳しく見ることにする。

連体数量詞が必ずしも遊離数量詞に対応しないということは2.1.節でも見た通りであるが、それでは一見対応しているように見える(19)のような場合をどう説明するのであろうか？

(19) {10 段の階段を／階段を 10 段} のぼった。

国広(1980:16)では、連体数量詞を使って「10 段の階段」といえば、総数が 10 段の階段であるのに対して、遊離数量詞で「階段を 10 段のぼる」といえば、その階段の総数は 10 段以上であることを指摘して、前者を「全体的」、後者を「部分的」と呼んでいる。本稿でもそれぞれ＜全体読み＞、＜部分読み＞として2節で見たとおりである。ところが(20)のような場合では、連体表現は可能であるのに遊離数量詞表現は不可能となる。

(20) 太郎は今月 {2000cc の車を／*車を 2000cc} 買った。

しかし「2000cc の車」は、厳密には数量詞とは呼べない。連体表現の「2000cc の車」というのは、車の数量的な側面について述べているわけではなく、あくまでも車の持つ属性の一種として数値が用いられているだけなのである。ゆえに「2000cc」は遊離数量詞の位置で用いることはできないし、＜全体読み＞と＜部分読み＞のどちらも当てはまらない。奥津(1996b)はこれを属性Qと呼んで、実際に数量を表しているものは数量Qと呼んで、両者を区別している。とすれば(19)の「10 段の階段」という表現も、「10 段によって構成されている階段」という意味で、階段の持つ属性の1つとしてたまたま数量を表す語彙が用いられただけなのである。それに対して「階段を 10 段のぼる」というのは、「のぼる」という動作を数量的な側面から描写した表現である。ゆえに以下のような例文も同様である（例文は加藤(1997)より引用）。

(21) {400m のトラックを／トラックを 400m} 走る。

(22) 太郎は {2 リットルのウーロン茶を／ウーロン茶を 2 リットル} 買った。

連体数量詞を用いて「400m のトラック」と言えば、1 周が 400m のトラックのことであるが（属性読み）、「トラックを 400m」といえば、どんな長さのトラックでもよく、走った距離を数量的に表すと合計で 400m ということである（数量読み）。例文(22)の場合も同様で、「2 リットルのウーロン茶」といえば、買ったウーロン茶が持つ属性（特徴）の1つとして「2 リットル」という数量が用いられており、つまり2 リットルのペットボトルに入ったウーロン茶のことを指す。ところが遊離数量詞を用いた「ウーロン茶を 2 リットル」ではそのような意味は薄く、どのような形であれ、合計で2 リットルという意味になる。ゆえに1 リットルの紙パックを2本買ったという解釈でもよいし、500ml の紙パックを4本でも良い。

3.3. 集合的認知と離散的認知

加藤(1997:56)では、属性Qの概念をさらに押し進めて、連体数量詞が集合的認知、遊離数量詞が離散的認知を反映していることを主張し、以下のような仮説を提示している。⁹

⁹ ただし加藤(1997:62)は、連体数量詞が全て集合的認知を表しているとは述べていない。加藤は数量詞の分類として「いくつ存在するか」という数について言及する存在数量詞（例えば「5 つ」「5 本」など）と、それ以外の数量的側面について言及する非存在数量詞（たとえば「30cm」「5 リットル」など）を区分しており、前者が連体格で用いられたものは＜集合的認知＞、後者が連体格で用いられたものは＜属性＞を表しているとしている。

談話における連体数量詞文規則についての仮説

- [1] 連体数量詞文は集合的認知を反映する。
- [2] 集合的認知が行われていることを示すには、その集合をひとつの単位として見なすだけの根拠が共有知識に存在しなければならず、その根拠が共有知識にないときは、根拠が示されなければならない。

談話における遊離数量詞文規則についての仮説

- [1] 遊離数量詞文は離散的認知を反映する。
- [2] 離散的認知が行われていることを示すには、その集合をひとつの単位として見なすだけの根拠（集合的認知の根拠）が共有知識に排他的に存在してはならない。

加藤(1997:56)

例えば青果店で「リンゴ2個で300円」のバックと、「リンゴ5個で600円」のバックの2種類が置いてあったとする。そのような状況では、集合的に認知される根拠が示されていることになるので、

(23) 5個のリンゴを下さい。

加藤(*ibid.*:55)

というように、集合的認知を反映する連体数量詞が用いられる。それに対して、リンゴがばら売られている状況では、集合的に認知する根拠が示されていないので、

(24) リンゴを5個下さい。

というように、離散的認知を反映する遊離数量詞を用いるのが普通である。また、家族に牛挽肉を買ってくるように頼む場合はどうなるのか。買ってきて欲しい量が500gのときは、(25b.)のように言っても、(25a.)とは言わないのが普通である。

(25) a. *「500gの牛挽肉を買ってきてちょうだい」

b. 「牛挽肉を500g買ってきてちょうだい」

加藤 (1997)

このような場合も同様で、「500gの牛挽き肉」というバックか何かがあれば別だが、そうでなければ集合的認知の根拠が示されないことになるので、連体数量詞を用いた方が不適切になる。

3.4. その他の数量詞について

数量といえは、すぐに思い浮かべるのは「いくつ存在するのか」という存在数について言及する表現であるが、中には変化数量を表すものもある。たとえば「縮む」「縮める」「伸びる」「伸ばす」「増える」「増やす」などの動詞を用いた場合、そこには必然的に変化が生じる。その変化量を数量的に表したものが以下である。

(26) a. 体重が1kg増えた。

b. 身長が1cm伸びた。

c. 世界記録のタイムを0.3秒縮めた。

さらには、もともと変化を表すための動詞ではないのだが、(27)の例文にあるように、間接的

に数量変化を伴うことを暗示する動詞と共起することもある。これを結果数量と呼ぶ。

- (27) a. 北陸自動車道を 250km 走った。
 b. 地面を 2 m 掘った。
 c. 勢い余って、川を 2 m 飛び越えた。

ふつう「走る」といえば、ある程度の距離を移動することになるので、必然的に移動距離というものが生じる。その距離が「250km」であることを示すのが(27a.)の例文である。また、地面を掘れば必然的にある程度の深さが生じるので、それを明示しているのが(27b.)である。さらに(27c.)の「越える」という動詞は、ある目標地点までの距離以上を移動するということであるから、もし(27c.)の川の横幅が 3 m であれば、「2 m 越える」ためには 5 m のジャンプをしなければならない。このように、何らかの動作の結果、必然的に生じる数量的な変化もある。この結果数量は、先に見た変化数量とほぼ同じものとして考えることが出来る。

他にも程度差を表す場合があり、これは対応する連体数量詞文を持たない(加藤 1997)。このような数量詞は、「高い」、「年上」、「少ない」のように、何かと比較する表現の場合に用いられるものであり、その比較対象との程度差を明示化したものである。

- (28) a. 良樹は三郎より 5 cm 背が高い。
 b. 可奈子は小百合より 3 才年上だ。
 c. うちのクラスは隣のクラスより 1 人少ない。 加藤(1997:40)

このような程度差を表す場合は、数量詞が修飾する名詞を明示することができるのだが、連体数量詞や同格数量詞を用いることはできず、遊離数量詞しか使えない。

- (29) a. 良樹は三郎より { * 5 cm の身長が / * 身長 5 cm が / 身長が 5 cm } 高い。
 b. 可奈子は小百合より { * 3 才の年齢が / * 年齢 3 才が / 年齢が 3 才 } 上だ。
 c. うちのクラスは隣のクラスより { * 1 人の人数が / ? 人数 1 人が / 人数が 1 人 } 少ない。

このように、程度差を表す場合には遊離数量詞しか用いることができない。対応する連体数量詞や同格数量詞が存在しないということは、遊離数量詞の本質的機能をさぐる上で、程度差を表す数量詞こそがカギとなることを示唆している。本稿では、遊離数量詞が連体数量詞や同格数量詞とは全く違った認知に基づくものであることを示した上で、本節で見たような結果数量や程度差を表す数量詞は active-zone を言語で明示化した要素であると 5 節で主張し、他の全ての遊離数量詞も同様に扱うことが出来ると論じる。

3.5. 格の制約について

多くの先行研究では、数量詞の移動が起こる場合の制約について述べられている。連体数量詞と同格数量詞のどちらから移動させるにしても、数量詞移動は主語または目的語の名詞句からの移動に限られるというのが大方の意見である。ただし 2 節でも見たように、遊離数量詞は移動の結果に生じるものでないことは明らかであるので、移動元の名詞句に対する制約と考えることは不適切であろう。とすれば、生起している遊離数量詞が修飾していると思われる先行詞の名詞句に対する制約とでもいうべきであろうか。とくかく、以下の例を見て欲しい。(30)は主語の場合、

(31)は目的語, そして(32)は間接目的語の場合である。主語や目的語の場合は問題ないが, 奥津(1969)や井上(1978)は間接目的語の場合に遊離数量詞を使用できないことを指摘している。

- (30) a. 昨日 学生が 5 人 先生の家に来た。
 b. 机の上に 本が 3 冊 ある。
 (31) a. 僕は毎日 コーヒーを 3 杯 飲む。
 b. 昨日本を 3 冊 買った。
 (32) a. *私はこの辞書を少年達に数人プレゼントした。(井上 1978)

また井上(1978)では, 多少の個人差はあるとしながらも, 以下のような「に」格ならば遊離数量詞が許されることを指摘した上で, これを副目的語と呼んでいる。

- (33) a. ?加藤さんは旅行に参加する学生に数人電話した。
 b. 私は団体客を泊める宿屋に 2, 3 軒当たってみた。

主語や目的語といった場合に必ず問題になるのは, それが表層格レベルで働く制約なのか, それとも意味格レベルで働く制約なのかという問題である。この点に関して, Shibatani(1977), 柴谷(1978)は, 表層格に対する制約であるとしているが, Harada(1976)や塚本(1986)は文法関係, つまり意味格に対する制約であるとしている。これに関しては次の文を見て欲しい。

- (34) a. このクラスの学生達に この問題が { *5 人 / ? 5 問 } 解けるだろうか?
 b. このクラスの学生達に この問題が { *5 人以上 / 5 問以上 } 解けるだろうか?

例文(34a.)の場合は, 意味的には「学生達に」が主語であるはずなのだが, それを先行詞とする遊離数量詞は不適切となるが, 表層格がガ格である「この問題が」を先行詞とする場合ならば, それほど容認度は下がらないようである。また, 「以上」を加えた(34b.)になれば, この容認度の差はさらにハッキリすると思われる。ただし表層的にはガ格といっても, 「この問題が」の意味格は目的格になるので, どちらの原理に基づいて容認されているのか不明である。しかし, 仮にもし遊離数量詞にかかる制約が意味格に対するものであるとするなら, 「5 人」や「5 人以上」の容認度が低いという事実を説明できないことになるので, 少なくとも意味格に対する制約ではなさそうである。

また, 奥津(1996a.)では「と」、「で」、「から」などの場合も見当されているが, やはりどちらの遊離数量詞に対しても強い制約がかかっているようである。(以下の例文は全て奥津(1996a.:117)による)

- (35) a. 田中先生は学生 5 人とセミナーをしている。
 b. *田中先生は学生と 5 人セミナーをしている。
 (36) a. 一行はバス 3 台で箱根に向かった。
 b. *一行はバスで 3 台箱根に向かった。
 (37) a. フィルム 1 本から 1 2 枚とれます。
 b. *フィルムから 1 本 1 2 枚とれます。

4. 認知レベルの考察に向けて

4.1. 認知言語学の視点

さて、実際に遊離数量詞の機能を認知言語学の視点から分析する前に、認知言語学の基本的な理念と必要な概念について簡単に触れておきたい。認知言語学においては、統語構造を意味を全く独立したモジュールとして考えるのではなく、それらがお互いに密接に関わり合っていることを前提としている。ゆえに、統語論の分野でいわゆる「パラフレーズ」の関係にあるとされる文でも、そこには話者の異なる認知のストラテジーが反映されているとして、それらを同義とは見なさない。たとえば以下の文では、客観的には同じ状況を描写している。

(38) a. しめた、まだ半分ある！

b. しまった、もう半分しかない！

山梨(1995:9(一部改))

しかしこれらの文では、その状況に対する話者の捉え方が全く異なる。まだ半分残っている部分に焦点を当てて状況を把握している場合と、すでに無くなってしまった部分に焦点を当てて状況を把握している場合は、おのずと言語表現も違ってくる。このように、客観的には同じ状況を言語化するにしても、その状況に対する話者の認知が異なれば、そこから産出される文も異なるのである。真にその文の意味を論じるためには、真理条件的な表層レベルの意味を論じるのみでは不十分であり、その文に反映されている話者の状況認知のストラテジーまで深く掘り下げて分析するのが認知言語学の基本的な姿勢である。

話者による状況認知の違いは、品詞の選択にも関わる問題である。たとえば以下の例文も、一般にはパラフレーズの関係にあるとされるが、話者の状況認知の違いが反映されている。

(39) a. He fell.

b. He took a fall.

Langacker(1987:146)

これらの文によって描写されている状況は、客観的には同一の事象である。しかし(a.)の表現では、問題の事象を時間軸にそった連続的な過程からなる事象として捉えたことが反映されており、(b.)の表現では時間を捨象して事態を一括的に捉えられたことを反映している。Langacker(1991:80)では、前者を連続的スキニング(sequential scanning)、後者を一括的スキニング(summary scanning)と呼んで区別している。

4.2. 参照点(Reference Point)と活性領域(Active-zone)

参照点(Reference Point)とは、ある標的(target: ターゲット)にメンタルコンタクトをとるために経由する対象のことであり、Langacker(1993)では以下のように述べられている。またそれを図1のような図式で表している。

(40) "... [reference point] is best described as the ability to invoke the conception of one entity for purpose of establishing mental contact with another, i.e., to single it out individual conscious awareness. ... For example, I deliberately use a perceptual reference point when I locate the North Star by mentally tracing a path along the end of the Big Dipper." (Langacker 1993: 5)

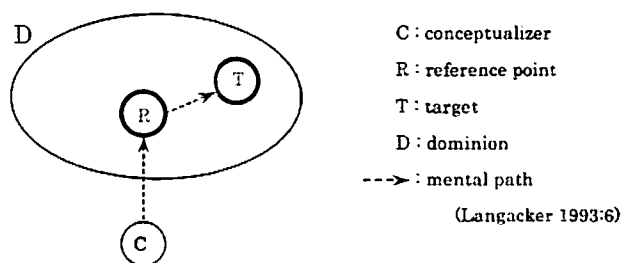


図 1

参照点はターゲットを認知する際の手掛かりとなるものであるから、まず参照点自体が認知しやすくなければならない。故に共有知識や旧情報が参照点として用いられる場合が多い。また、以下の(41a.)では、*bike*の存在している位置を同定するために、*house*を参照点として経由することによって *bike*を同定する認知プロセスが反映されている。一方、(41b.)の文は、*bike*と *house*を入れ替えた文であるが、いささか容認度が落ちる。その原因は、ある対象を同定する場合には、動かず安定したものの方が参照点としてふさわしいのに、そうではない *bike*が参照点として用いられているからである。

(41) a. There is a bike neat the house.

b. ?There is a house near the bike.

Talmy(1978)

ところが、必ずしもターゲットが言語で過不足なく明示されるとは限らない。たとえば(42a.)の例文である。一見これは問題ない表現に見えるが、よく考えてみると、「犬」は「猫」の全体に噛みついたわけではなく、「猫」という語によって表されている実体の一部分に噛みついたというのが通常の解釈であろう。ゆえに、より厳密な言語表現をするならば、(42b.)のようになるであろう。(Langacker1991, 1999)

(42) a. 犬が猫に噛みついた。

b. 犬は自分の口のある部分を使って猫の体の一部分に噛みついた。

しかし我々は、常にそこまで厳密に事象を言語化しているわけではない。このとき、本来ならば描写されている事象に直接的に関わっているにもかかわらず敢えて捨象されている部分のことを、Langacker(1987,1991)は active-zone(活性領域：以下 az.と略す)と呼んでおり、(43)のように述べている。また例文(42a.)で表現されている犬(tr.)と猫(lm.)の関係は図2のように表記され、az.に相当する部分は、図2のように斜線によって表記される。

(43) "Those facets of an entity capable of interacting directly with a given domain or relation are referred to as the active-zone of the entity with respect to the domain or relation in question. (Langacker 1987: 272)

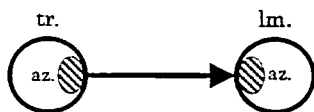


図 2

図2では、tr.(犬)が lm.(猫)と「噛みつく」という行為によって関係づけられている。また、小さな斜線によって示されている az.は、それぞれ犬の口の部分と猫の体の一部分である。この2つの az.が「噛みつく」という動作に直接的に関わっている部分であるが、言語化（プロファイル）されずに az.となっているので太線では示されない。az.に関しては、(42b.)で示した以上に細かく設定することも可能であるが、おそらくは、我々はそこまで細かい認知を意識的に行っているわけではないであろう。状況を細かく認知して言語化することによる処理コストと、情報伝達の効率を考えると、最も効率的で認知しやすいレベルで留めているわけである。¹⁰

この az.というものは、典型的には<部分/全体>の関係になっているものに多く見られる現象であることは否定できないが、なにも身体部位にのみ起こるわけではなく、また az.が必ずしも<全体>に対する<部分>に相当するとも限らない。これまで広くメトニミーと呼ばれてきた現象も、参照点や az.という概念と密接に関係している。

(44) She heard a trumpet.

上の文では、trumpet がプロファイルされているものの、「トランペット」という個体そのものを「聴く」ことなど出来るわけもなく、実際に「聴く」のはトランペットの「音」である。¹¹ ゆえにこの場合、プロファイルされているもの（「トランペット」）と実際の現象に直接的に関わっているもの（トランペットの音）が完全には一致しない。このとき、プロファイルされている「トランペット」は参照点(R)の働きをし、実際に現象に直接関与している「音」は参照点から想起されるターゲット(T)なのであるが、そこが az.になっているのである。（図3）

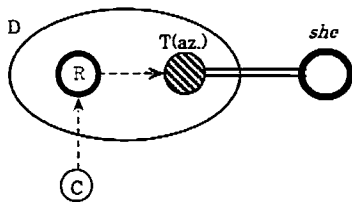


図 3

さらに次の例文 (45a.,b.) において、プロファイルされているのは「彼/him」であるが、実際に叩かれたのは彼の体の一部分であり、そこが az.になっている。そして Langacker(1999:64)

¹⁰ どこまで細かく認知および言語化するのは、おそらくは基本レベルカテゴリーと関係している。

¹¹ az. (もしくはメトニミー) は、典型的には、動詞との共起によって初めて生じるものであり、名詞単独ではメトニミーの解釈は生じない。

自身も"....there is often some communicative need or purpose for being specific in regard to the active zone. A variety of devices are potentially available to make this possible."と述べているように, az.になっている部分を何らかの方法で言語化することも可能である。以下の例文においては, 明示化された az.は[]で示してある。¹² 中村芳久氏 (私信) はこのような現象のことを active-zone specification (活性領域の特定) と呼んでいる。

- (45) a. 私は彼 [の肩] を叩いた。
b. I hit him [on the shoulder].

このような現象は多くの文で見ることができる。通常ならば az.ということだけで敢えて言語化することのない (省略しても構わない) 要素や, もしくは語用論的条件さえ整えば省略できる要素は全て az.と見なすことができる。¹³ そしてそれらは下の例文の[]内で示したように, 敢えて言語化することも可能である。このように, az.と解釈される部分を敢えて言語化した要素を, 「特定化された活性領域 (active-zone specified, 以下 az.-spec.と略す)」と呼ぶことにする。

- (46) a. 私は [az.-spec. 服を/成績を/息子を] 誉められた。
b. 太郎の [az.-spec. 運転している/設計した/所有している/好きな] 電車
c. 長髪 [az.-spec. の人] は雇わない。
(47) a. I sent a letter to New York [az.-spec. to Bill].
b. Portraits are tough [az.-spec. to paint].
c. Another war is certain/sure/likely [az.-spec. to occur]. Langacker (1995)
d. John McEnroe was also there [az.-spec. in the corner] with wife Tatum O'Neal and son Kevin to celebrate his victory..... (COBUILD on CD-ROM)
(48) a. この問題は [az.-spec. 解くのが/説明するのが] 難しい。
b. スマップの中居君は [az.-spec. 歌うのが/ロパクが] うまいね。
(49) a. そのテーマは [az.-spec. 議論するのが/説明するのが/論文を書くのが] 難しい。
b. 音楽は [az.-spec. 演奏するのが/歌うのが/聴くのが] 楽しい。 尾谷(1998b.)

ここに挙げた例文の az.-spec.は, コンテキストの助けさえあれば省略できる要素ばかりである。処理の負担を避け, 効率よく情報伝達するために, 言及しなくても情報伝達が過不足無く行われると判断された場合には, その要素は az.扱いになる。

上に挙げた例文の大半は「～は～が」という二重主語文であり, 「～が」の部分が az.になることが多いのであるが, 中には下例(50)のように, 「～が」に相当する部分を補うことによって容認度が下がる場合も存在する。

- (50) a. モノポリーは [az.-spec. ?遊ぶのが/?するのが] 楽しい。
b. 酒は [az.-spec. ?飲むのが] うまい。

¹² az.を言語化するといっても, 一義的に決まるわけではない。例えば「私は彼の体の下腹部のおへその少し上あたりを叩いた。」というように, 思いつく限りいくらかでも詳細に言語化することも可能である。

¹³ いわゆる「省略」という現象は全て az.である, と Langacker が公言しているわけではない。しかし少なくとも筆者はそう言っても構わないだろうと考えている。ただし, 全てが同じ種類の az.というわけではない。例えば実際の談話においては, コンテキストに依存することによって頻繁に省略が行われるが, それらは談話依存的な az.ということになるだろうし, メトニミーなど慣用的に用いられている場合は, 慣用的 az.ということになるであろう。

例文(50a.,b.)は、先に挙げた(48)(49)の場合と同じで、「～は」で主題化された「モノポリー」や「仕事」という概念に付随する行為の側面が az.化されている場合であるが、それらの概念に関する百科事典的知識の中に既に「何らかの行為を行うものである」という情報が存在するために、無理にそれを言語化することによって余剰性が生じているのだと思われる。その証拠に、余剰性を回避するために少し情報価値を付加してやれば、(51)のように全くの容認文となる。¹⁴

- (51) a. モノポリーは [az.-spec. 3人以上でするのが／みんなでするのが] 楽しい。
b. 酒は [az.-spec. 大勢で飲むのが／熱燗で飲むのが] うまい。

となれば、az.とは不用意に明示すると余剰性が生じるために敢えて言語化されていない側面であると言えることができる。そしてこの余剰性とは、会話中の文脈（コンテキスト）によって生じるものもあれば、単に言語化する際に成された認知の深さ（詳しさ）に関係するものもある。たとえば前者は日常会話で頻繁に行われる省略という行為であり、後者は例文(42a.)のようなものであろう。このように az.とは余剰性を避けることと密接に関係しており、それは同じく az.-spec. の一種であると本稿で主張する遊離数量詞についても言えることであるが、詳しくは次章以降で見る。

5. Active-zone と遊離数量詞

この節では、まず 5.1 節で連体数量詞の機能について論じてから、次の 5.2 節で遊離数量詞の機能について論じる。そして 5.3 節以後は、先行研究や 2 節および 3 節で論じられた遊離数量詞の諸特徴について、なぜそのような特徴が見られる（生じる）のかについて認知文法の観点から自然な説明を与えてゆく。

5.1. 参照点としての連体数量詞

遊離数量詞の機能を論じる前に、連体数量詞の機能についてまず見ておこう。2 節でも見たように、奥津(1969)は連体格で現れる数量表現は被修飾名詞の属性を記述していつとして、それらを属性 Q と呼んでいた。たしかに以下の連体数量詞文(52)で用いられている数量詞は、(53)のようなコピュラ文へと書き換えができることから、どれも被修飾名詞の属性を表していると解釈することができる。

- (52) a. 10 段の階段をのぼった。
b. 400m のトラックを走った。
c. 2m の川を飛び越えた。
(53) a. その階段は 10 段だ。
b. そのトラックは 400m だ。
c. その川（幅）は 2m だ。

しかし以下の例では、「国土」の属性として「5000 平方キロメートル」が用いられているとは言いきれない。もし無理にでも＜属性＞という解釈をあてはめるならば、むしろ「失われた国土」

¹⁴ ただ単に「するの」だけであっても、次のような対比表現にすれば情報価値が上がるので容認文になる。

(i) ただ見ているだけでなく、スポーツはするのが楽しいんだよ。

の持つ属性ということになるであろう。

(54) その国は 5000 平方キロメートルの国土を失ったが、まだ広大な国土が残っている。

(55) a. #その国の国土は 5000 平方キロメートルだ。

b. その国の失われた国土は 5000 平方キロメートルだ。

当然のことであるが、連体格として現れる要素はなにも数量詞に限ったことではない。以下ののような例も、連体格が直ちに属性を表していると解釈しづらい。このような数量詞以外の連体格も併せて考慮、説明する必要がある。

(56) a. 彼の父は有名な画家だ。

b. 車のキーを紛失した。

c. 京都の秋が一番美しい。

(57) a. *父は彼だ。

b. *キーは車だ。

c. *秋は京都だ。

これらの例文では、連体格である「彼の」「車の」「京都の」は、後続する名詞「父」「キー」「秋」を認知する際に極めて重要な働きをしている。もしも単に属性を表しているだけならば、省略してしまっても問題ないはずである。しかし(58)のように連体格を使用せずに裸名詞のまま用いると、元の文と意味が全く異なってしまうのである。(58a.)では、「父」が誰を指しているのか不明になってしまうので、正確に意味を解釈することが出来なくなってしまう。¹⁵ (58b.)の「キー」も、部屋のキーなのか、それともバイクのキーなのか聞き手には全く同定することができなくなるので、実際のコミュニケーションで用いるには支障がある。

(58) a. 父は有名な画家だ。

b. キーを紛失した。

c. 秋が一番美しい。

また(58c.)の場合にも、どの「秋」について述べているのか特定されていないので総称としか解釈できず、「他の季節に比べると、秋という季節が一番美しい」という解釈になってしまうので、やはり元の文とは意味がずれてしまう。このように、連体格は単に属性のみを表しているとはいえないのである。

それでは、連体格は何を表しているのかと言えば、それは例文(58)からも既に明らかである。もし(56)で用いられていた連体格がなければ、聞き手はその名詞が具体的に何を指示しているのか正確に理解できない。つまり連体格は、それが修飾している名詞が表す指示物を認知もしくは同定する際の「手掛かり」として機能していると同時に、話者がその対象をどのように認知した（もしくは、認知している）のかを聞き手が解釈する「手掛かり」にもなっているのである。それゆえに連体格を省略してしまうと、名詞句が何を表すのか一義的に解釈しづらくなる。このような連体格の役割は、Langacker(1991,1993)のいう Reference Point (参照点) として機能していることを示唆する。中でも、日本語の連体助詞「の」の認知レベルの意味は参照点マーカー

¹⁵ 勿論、デフォールと解釈は「自分の父」となるであろうが、それこそ元の文とは意味が全く異なってしまう。

であることは中村(1998)や尾谷(1998b), 小熊(2000)でも既に論じている通りである。ここで「認知レベルの意味」と表現したのは理由がある。「の」という助詞を『日本文法大辞典』(1971、明治書院)で調べると以下のような<意味>が列挙されており、一見このような分類は正しいと感じられる。

格助詞	(1)	私の本	(所有・所属)
	(2)	緑のリボン	(性質・状態)
	(3)	父の帰り	(動作の主体)
	(4)	反乱軍の鎮圧	(動作の対象)

ところが、次のような例文になると、「の」で表されている<意味>は様々な解釈が成り立つ(西山 1991,1993)。

(59) 太郎の電車

西山(1991,1993)

この場合、当然でフォールト解釈は「太郎が所有している電車」であろう。この時、「の」の意味は<所有>であると言うことができるかもしれないが、コンテキストによっては「太郎が運転している電車」「太郎が設計した電車」「太郎が清掃担当の電車」「太郎が乗っている電車」「太郎が乗る予定の電車」……という具合に様々な可能性が考えられる。これらの場合には、「の」がどのような<意味>を表すと記述するのだろうか？ 可能な解釈を列挙するだけの分析だけではそれを説明したことにはならないし、<意味>(つまり可能な解釈の種類)がいくつ存在するのかは分析者の恣意的な分類でしかなくなる。あらゆる物質を構成している元素の種類はある程度決まっているが、可能な解釈の種類がいくつ存在するのかは一概には決められないからである。このような解釈の種類は<解釈レベルの意味>と呼ぶならば、それら全ての解釈の根底に潜んでいる話者の認知の営みを<認知レベルの意味>と呼ぶことにする(c.f.中村 1997,1998)。当然のことながら認知文法(Langacker 1987,1990,1991,1999, 中村 1997,1998)は言語現象を人間の認知の営みという側面から記述・説明するのがその主眼であるから、認知文法が追い求める<意味>というのも後者であることは言うまでもない。

さて、ここで話を連体数量詞に戻すことにしよう。連体数量詞も連体格の一種であるから、やはり被修飾名詞にとって参照点の役割をしていることになる。つまり被修飾名詞で指示されているものを認知(もしくは同定)する際の「手掛かり」として機能する。最も良い例は以下の場合であろう。

(60) 「3個のリンゴを下さい。」

このような発話状況というのは、例えばリンゴが3個パックで売られているような状況であり、ばら売りされている状況は想像しにくい。つまり加藤(1997)のいう集合的認知が為されている状況である。例文(61)が発話されるような状況で、買いたいリンゴを同定する際に「3個の」という連体数量詞が参照点の機能を果たしている。つまり「3個」という数量概念(もしくは属性)を通じて買いたいリンゴを同定しているのである。もちろん数量的な概念だけが参照点として用いられるわけではない。当然のことながら、買いたいリンゴを同定(区別)するために十分有用だと見なされる概念であれば、他にも空間的位置、色彩、形状などいかなる概念でも参照点として用いることも不可能ではない。

- (61) a. 「そっちのリングを下さい。」
 b. 「赤い方のリングを下さい。」
 c. 「大きい方のリングを下さい。」

加藤(1997)は連体数量詞が集合認知を反映していると述べているのは全く正しいし、話者の認知の営みを鋭く捉えた分析であるが、それは数量詞に限ったことである。数量詞も含めて、あらゆる連体格の＜認知レベルの意味＞を求めるとすれば、それはやはり参照点といわざるを得ない。つまり連体数量詞の機能は、他の連体格と同時にマクロなレベルからみれば参照点構造を反映するものであり、連体格の中でもとくに連体数量詞に限っては集合的認知を反映しているということになる。

連体数量詞の認知的機能は、名詞句内の主要部名詞へとメンタルアクセスするための参照点、つまり句レベルの参照点である。

連体数量詞が参照点構造を反映するといっても、数量詞自身が参照点となる力を有しているわけではなく、厳密には助詞「の」が参照点構造を保証しているのである。なぜなら、連体数量詞文から格助詞「の」を取り去ると、それはもう連体数量詞とは解釈されない。

- (62) 5個 リングを下さい。

このような発話が為される状況は、5個入りのパックが売られている状況（つまり集合認知が為される状況）ではなく、むしろバラ売りされている状況であろう。つまり(62)の文頭にある「5個」は、単語同士の語順こそ連体数量詞文と同一であるが、「の」が抜けたことで遊離数量詞になってしまうのである。このように、連体格は後続する名詞で表される概念にメンタルアクセスする際の参照点として用いられており、連体数量詞とは、たまたまその参照点として数量的概念が用いられている場合なのである。

5.2. az.-spec.としての遊離数量詞

さて、それでは話を遊離数量詞に戻すとしよう。連体数量詞や遊離数量詞とは異なり、遊離数量詞は述語で表される行為や出来事における数量的な az.を言語で明示化したもの、つまり az.-spec.の一種なのである。これが本稿で最も主張したいことの1つである。例えば以下のような例文を考えてもらいたい。

- (63) 北陸自動車道を走った。

北陸自動車道が全長何 km あるのかは知らないで、例えば全長が 1000km であると仮定しよう。しかし(63)の解釈として、北陸自動車道の端から端まで 1000km 全てを完走したとは誰も思わないであろう。実際に走った距離が 400km であれ 950km であれ、(63)のように表現することができる。つまり、(63)の文でプロファイルされているのは「北陸自動車道」であるが、その中で実際にどの部分を走ったのかは明示されておらず、そこが az.として解釈されているのであ

る。ゆえに、これを図示するならば以下になる。横長の長方形が北陸自動車道の全体で、その全長は 1000km であることを表している。

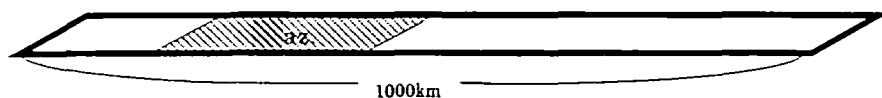


図 4

そしてプロファイルされている「北陸自動車道」の中でも、実際に走行した部分が az.として解釈されている。この az.に相当する部分を数量に換算して言語で明示化する場合には、(64a.)のような連体数量詞では不適切であり、(64b.)のように遊離数量詞でなければならない。これを図示すると図 5 のようになる。

(64) a. ??400km の北陸自動車道を走った。 (連体数量詞)

b. 北陸自動車道を 400km 走った。 (遊離数量詞)



図 5

つまり遊離数量詞とは、述語によって表されている行為と関与している参与者の中の特に直接的に関与している部分（つまり az.）を、特に数量的な側面から叙述するための要素なのである。ここで注意しておきたいのは、遊離数量詞が被修飾名詞と直接的に結びついているわけではないということである。先行研究のほとんどが、連体数量詞と同じように遊離数量詞も被修飾名詞と直接的に結びつけて分析していたために、大きな落とし穴に陥っていたのである。遊離数量詞はあくまでも述語で表されているイベントとの関係において az. spec.と見なされるのである。ゆえに(64b.)の「400km」という遊離数量詞は、名詞句「北陸自動車道」と直接的に結びついているわけではなく、実際に走行した距離を示すのだから、むしろ述語「走った」と結びついている。このことは 5.3.節で改めて詳説することにする。

ところで、例文(45)でも見たように、az.になっている箇所が身体の一部である場合は、それを表す身体部位名詞を用いて例文(65a.)のように az.を明示することが出来るが、「北陸自動車道」のような名詞においては、そのような部分を表す名詞は存在しない。そこで、実際に走行した部分（つまりイベントレベルの az.）について言及するときは下例(65b.)のように数量に換算して表すしかない。

(65) a. 私は彼〔の肩／の顔／の背中〕を叩いた。

b. 北陸自動車道を {400km／ちょっとだけ／ずいぶん} 走った。

高速道路に関する限りでは、なにも数量に換算せずとも *az.*spec.* を用いることができる。たとえば(66a.)のように、実際に走行した部分が分かるように起点と終点を明示してやればよいのである。このような場合、実際に走った部分を明示するのに連体数量詞を用いることは出来ない。なぜなら北陸自動車道という高速道路は富山～金沢間だけを指すわけではないので、「富山から金沢」という参照点を用いるだけの理由が必要だからである。¹⁶

- (66) a. 北陸自動車道を富山から金沢まで走った。
b. ??富山から金沢までの北陸自動車道を走った。

さて、ここで最初に議論してきた「北陸自動車道を 400km 走った」という場合の数量詞は結果数量(3.4.節参照)と呼ばれるものであるが、この結果数量に関してもう1つ事例を見ることがしよう。次の(67)の例では、「越える」という動詞を用いた場合である。「越える」といえば、必然的に「ある目標地点をオーバーする」ということが含意されるが、(67)のように連体数量詞で表現すると、それは「川」の幅が2mであることを意味する。

- (67) 2m の川を飛び越えた。

その「川」を「飛び越えた」ということは、実際にジャンプした距離が2m以上であることを意味する。もし2m以下ならば、「川」を「越える」ことはできないからである。つまり(67)は必然的に「2m + α 」の距離をジャンプしたことを意味するのだが、その「 α 」の部分が明示されておらず *az.* になっている。これを図示すると図6のようになる。

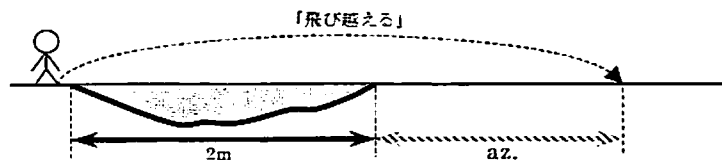


図6

ところが(68)のように「2m」を遊離数量詞として用いるならば、今度は川幅が何mかが不明となり、代わりに「越えた」距離が「2m」であることを表すようになる。(図7) つまり(68)の遊離数量詞は、図6で *az.* になっていた部分を明示する働きをしているのである。

- (68) 川を [*az.*spec.* 2m] 飛び越えた。

¹⁶ たとえば、参照点である「富山から金沢まで」の情報価値を上げるために、以下のような対比文脈にしてやれば(67b.)も容認度が上がる。

(i) 新潟から富山まではひどい渋滞ですが、富山から金沢までの北陸自動車道は順調に流れています。

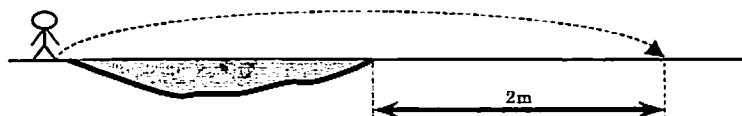


図 7

さて、次に変化数量（3.4.節参照）の場合を考えてみよう。変化数量とは、「伸びる」「伸ばす」「縮む」「縮める」「増える」「増やす」「減る」「減らす」などのように、何かしらの変化が必然的に生じることを含意する動詞を用いた場合に、その変化を数量的に示すものである。

- (69) a. 太郎は身長が 1cm 伸びた。
b. ダイエーは株価を 500 円下げた。

「伸びる」や「下げる」などの動詞は、必然的に何かしらの変化を含意する。(69a.)では身長が変化しており、その変化量が「1cm」であると述べている。(69b.)では株価が変化しており、その変化量が「500 円」である。すなわち変化数量とは、変化前の変化後の程度差を数量的に表現した要素なのである。もちろんこの程度差は、コミュニケーション上の必然性がなければ、(70)のように明示しなくてもよい。

- (70) a. 太郎は身長が伸びた。
b. ダイエーは株価を下げた。

もちろん、これらの例では程度差こそ明示されてはいないが、何らかの変化が生じていることは疑いなく、その変化量こそが az.として解釈されているのである。よって(70a.,b.)を図示すると以下の図 8-1、図 8-2 のようになる。

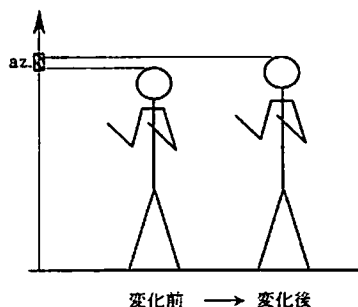


図 8-1

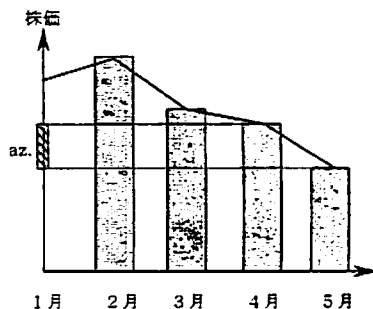


図 8-2

このとき、どれだけ変化したのかという部分が az.として解釈されているのであり、それが図 8-1, 図 8-2 の中では斜線部で示されている。そしてこれらの az.を言語で明示するためには、連体数量詞でも同格数量詞でもなく、遊離数量詞が用いられる。遊離数量詞によって叙述されているものは(つまり az.-spec.)は、図 9 の中で太線で示されている部分に相当する。

- (71) a. 太郎は { *1cm の身長が / ? *身長 1cm が / 身長が 5cm } 伸びた。
 b. ダイエーは { *500 円の株価を / *株価 500 円を / 株価を 500 円 } 下げた。

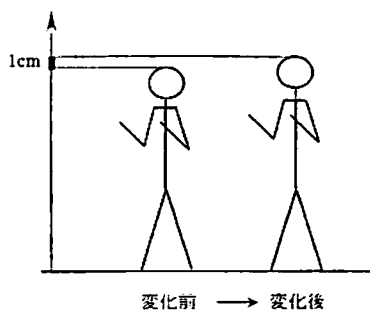


図 9-1

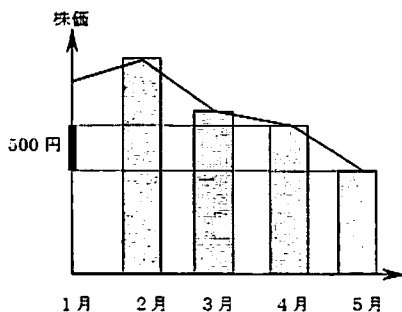


図 9-2

このような場合は、変化する前と変化した後の程度差について数量的に叙述するものであるから、連体数量詞や同格数量詞のように名詞そのものを修飾するためだけの要素ではパラフレーズすることが出来ないものと思われる。あくまでも、述語によって表されているイベント(動作)が生じて初めて数量的な変化も生じるのであるから、やはり遊離数量詞は述語(イベント)レベルの az.-spec.としか考えるしかない。それに比べて連体数量詞や同格数量詞は、直接名詞を修飾するための要素であるから、述語(イベント)レベルを介して解釈する必要はなく、むしろ名詞句レベルのみで機能している要素である。

最後に程度差を表す数量詞(3.4.節参照)について見てみよう。これは変化数量と非常によく似ている。なぜなら変化数量とは、同一物の変化前と変化後と比較してその程度差について叙述するのに対し、程度差を表す数量詞とは、全く別の二者を比較してそれらの程度差について叙述するものだからである。前者がどうき名程度差とすれば、後者は静的な程度差とも言える。程度差の数量表現の例は以下のようなものである。

- (72) a. 太郎は次郎より身長が 1cm 高い。
 b. ダイエーはローソンより株価が 500 円安い。

これらの文で用いられている「～より高い」や「～より安い」という述語は、二者の間に何らかの違い(程度差)が存在しているということを含意する述語であり、通常ならば、その程度差は az.として解釈されている。しかし情報伝達上の理由によってそこまで明示化しなければならない場合は、例文(72)のように遊離数量詞で表現される。ここで使用されている「1cm」と「500 円」は、述語が含意する az.を言語で明示したもの(つまり az.-spec.)であり、それを図で表す

と以下になる。このとき、(73)からもわかるように、連体数量詞や同格数量詞を用いることはできない。

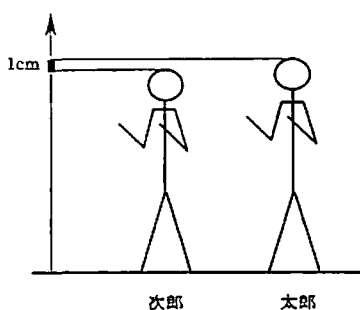


図 10-1

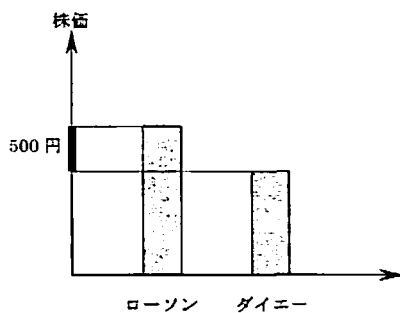


図 10-2

- (73) a. 太郎は次郎より { *1cm の身長が / ??身長 1cm が } 高い。
b. ダイエーはローソンより { *500 円の株価が / *株価 500 円が } 安い。

さて、結果数量や変化数量と同様に、程度差の az.-spec. の場合も遊離数量詞が用いられ、連体数量詞や同格数量詞を用いると不適切であることから、遊離数量詞の認知レベルの意味として次のようにまとめることができる。これが本稿の主張の 1 つである。

遊離数量詞の認知的機能は、述語が表す内容（イベント）に関与している参与者の数量的側面の az. を明示化する要素、つまりイベントレベルの az.-spec. である。

5.3. <全体読み>と<部分読み>

2 節、3 節でも見たことであるが、連体数量詞ならば<全体読み>、遊離数量詞ならば<部分読み>が優勢であるという事実がある。たとえば以下の文では、連体数量詞を用いた場合は階段の総数が 10 段でありその全てをのぼったと解釈されるが、遊離数量詞の場合は階段の総数は 10 段以上あり、そのうち 10 段だけをのぼったと解釈される。

- (74) a. 10 段の階段をのぼった。
b. 階段を 10 段のぼった。

どの先行研究も、この 2 文にはそれぞれ<全体読み><部分読み>という特徴があるということとは指摘しているものの、なぜそのような解釈の違いが生じるのかまでは説明してない。そこで本節では、何故それぞれの解釈が生じやすいのかということを、連体数量詞と遊離数量詞の<認知レベルの意味>から説明できることを示す。

まず連体数量詞の特徴である<全体読み>から見ていこう。¹⁷ なぜ連体数量詞がこのような意味特徴を有するのかといえ、それはすべて連体数量詞が参照点として機能しているからである。参照点とは、ターゲットへとメンタルアクセスする際の認知の手掛かりとして使用するものであるから、ターゲットを認知する際に有効な概念でなければならない。そのため必然的に、ターゲットが持つ顕著な特徴（もしくは属性）が選ばれるのだが、属性なら何でも良いというわけではなく、他の候補と区別して目的のターゲットを認知できるような参照点が期待される。

- (75) a. 「そっちのリンゴを下さい。」
 b. 「赤い方のリンゴを下さい。」
 c. 「大きい方のリンゴを下さい。」
 d. 「3個のりんごを下さい。」

上の(75a.)は、ターゲットの空間的位置を参照点としてターゲットにメンタルアクセスする場合であり、(75b.)はターゲットの色彩、(75c.)はターゲットのサイズをそれぞれ参照点として用いた場合である。そしてその延長線上として、数量的な特徴を参照点として用いたものが(75d.)の例である。(75d.)の場合は、自分の買いたいリンゴを伝えるために、そのリンゴが持つ「3個」という数量的特徴を参照点として用いている。つまりこれは3個パックのリンゴということを表している。3個集まって1つの商品として売られているのだから、「3個」という数量はその商品を同定する際に有用な特徴になる。このとき、3個で1つの商品としてグルーピングされているわけであるから、たった1つ欠けても、たった1つ多くても、それは「3個」という特徴を持つ商品とは見なされなくなる。ゆえに、欲しいリンゴが3個入り1パックのときに数量的側面を参照点として使う場合は、欲しいリンゴの全体量を過不足無く表す「3個」以外の数量概念を参照点として使用することはできない。

- (76) a. *2個のリンゴを下さい。
 b. *4個のリンゴを下さい。
 c. *5個のリンゴを下さい。

このように、数量概念は常に過不足無く用いることが期待されるのである。これ以下の例文の場合も同じである。

- (77) 田中さんには2人の子供がいる。

論理的に考えた場合、田中さんには実際に3人の子供がいたとしても(77)のような発話は嘘にはならない。なぜなら子供が「3人いる」ということは、「2人いる」ということを含意するからである。しかし実際にこのような発話がされた場合は、田中さんの子供は2人であって、1人以下でも3人以上でもない解釈されるのが普通であろう。つまり「2人」という概念をわざわざ参照点として用いている限り、ターゲットである「子供」を同定する際に「2人」が有用な特徴であることを表しているのである。逆を言えば、複数のモノが1つの集合（この場合は<田中さんの子供>という集合）として存在するとき、その集合の全体数を過不足なく表す数量概念でなければ、認知的手掛かりとして役に立たないということである。

¹⁷ 加藤(1997)の言う<集合認知>という特徴も、この<全体読み>とほぼ同種と見なすことができる。

【設定：田中さんの子供が全部で2人しかいない場合】

- (78) a. ?*田中さんには1人の子供がいる。
 b. *田中さんには3人の子供がいる。
 c. *田中さんには4人の子供がいる。

例文(78a.)のように実際の存在数よりも小さい数を用いることは、大は小を含意するので明らかで嘘とは言えない。しかし、「1人」を参照点として採用するということは、必然的に他の参照点の可能性（たとえば2,3,4...などの数）を排除していることになる。ゆえにこの場合は事実とそぐわない表現ということになる。また、例文(78b.,c.)のように実際の数よりも大きい数を参照点として用いることも出来ない。なぜなら、それは存在しないものを参照点として用いることになるからである。

以上の議論から、連体数量詞が＜全体読み＞として解釈されやすい理由が明らかになる。わざわざ数量概念を参照点として用いる場合は、その参照点がターゲットを同定することを容易にする概念でなければならない。そのため、実際よりも多い数や少ない数を参照点として用いるとターゲットの同定が容易にするどころか逆に困難になるために、常に過不足無い数（つまり全体数）を用いることが期待されるのである。このように、連体数量詞が＜全体読み＞を反映する理由は、連体数量詞の認知レベルの意味、つまり参照点として用いられていることに起因する。

次に、遊離数量詞の無標解釈である＜部分読み＞について考えてみよう。実はこの原因も、やはり遊離数量詞の認知レベルの意味に起因する。つまり「述語（イベント）レベルの az.spec.」という機能ゆえに、遊離数量詞は＜部分解釈＞を受けやすいのである。

- (79) a. 北陸自動車道を400km 走った。

上の文の遊離数量詞「400km」は、「北陸自動車道」という名詞を直に修飾しているわけではない。ほとんどの先行研究は、連体数量詞文の一部と遊離数量詞文の一部がパラフレーズ可能な関係にあることに目を奪われるあまり、遊離数量詞も連体数量詞と同じように被修飾名詞と直接結びついていることを暗黙の前提と考えてしまい、大きな落とし穴に陥っていると思われる。前節でも見たとおり、遊離数量詞の認知レベルの意味は「述語（イベント）レベルの az.spec.」であり、名詞を直接修飾するための要素ではない。敢えていうならば述語を修飾しており、その述語を経由してイベントの参与者である名詞を修飾しているのだ。よって、遊離数量詞の無標解釈が＜部分読み＞になりやすい理由は、遊離数量詞の機能が（動詞で表されている）行為において az.となっている部分を数量的に明示するものだからである。ほとんどの場合、az.とは名詞で指示されている概念（全体）の中で特に行為と直接的に関与している領域（部分）のことを指すことが多く、遊離数量詞はそれを明示化したもの（az.spec.）であるから、必然的に＜部分読み＞になってしまうのである。

Langacker(1991,1999)も指摘するように、az.とはメトニミーの一種である。メトニミーとは、＜全体＞で＜部分＞を表すこともあれば、＜部分＞で＜全体＞を表すこともある。また、＜全体＞＜部分＞とは無関係に、近接関係によって指示を行うこともある。この中でも特に遊離数量詞は、＜全体＞に対する＜部分＞を明示化する az.spec.なのである。この＜全体＞と＜部分＞の関係が逆になることはまず無い。つまり、＜部分＞に対する＜全体＞を遊離数量詞が表すということである。敢えてそのような状況を考えるならば、以下の(b.)のような例である。

- (80) a. 5個のリンゴを3個食べた。
 b. *3個のリンゴを5個食べた。

上例の(a.)は、5個のうち3個という<部分>を遊離数量詞で表している場合であり、これは何の問題もないのだが、この関係を逆転させて(b.)のようにすることはできない。リンゴが3個しかないような状況では、「食べる」という行為の対象となることができるリンゴの数は当然3個までであり、4個以上を「食べる」ことは出来ないからである。要するに、存在数量以上の数量について言及することはできないということである。連体数量詞で「3個」と述べているのだから、それ以上の数が存在しているとは考えられないからである。

このように、遊離数量詞は全体数（存在数）よりも大きい数を表すことは出来ず、必ず全体数以下でなければならない。つまり遊離数量詞には、2つの解釈が存在する。1つは遊離数量詞が全体数量と同じ数量を表す場合であり、もう1つは全体数量未満の数量を表す場合である。しかしこの2つの中では、前者よりも後者の方が明らかに無標解釈である。なぜなら、全体数量と同じ数を表す場合は、遊離数量詞を単独で使用するだけでは多少不自然になるからである。

- (81) a. 5個のリンゴを3個食べた。
 b. ?5個のリンゴを5個食べた。
 c. 5個のリンゴを〔5個全部／5個とも〕食べた。

遊離数量詞が部分数量を表している(81a.)は全く申し分ない文である。しかし全体数量と同じ数量を表している(81b.)は、余剰性が感じられるので容認度が落ちる。それを避けるためには、「5個全部」や「5個とも」のようにして遊離数量詞に情報価値を付加する必要がある(例文(81c.))。このような余剰性は、az.に特有の現象である。az.とは実際の現象や行為と直接的に関わっているにもかかわらず、何らかの理由によりプロフィール（言語化）する必要のない部分のことを指す。ゆえに、もし az.に相当する部分のみを直接プロフィールすると（つまり az.-spec.を用いると）、当然のことながら余剰性が生じて文の容認度が落ちてしまう。そこで、それを回避するためには、az.-spec.単独で用いるのではなく、az.-spec.に更なる情報価値を付加しなければならない。このことは Langacker(1991,1999)でも指摘されている。

- (82) a. ? Your dog bit my cat somewhere with its teeth.
 b. Your dog bit my cat on the tail with its sharp teeth. Langacker(1999)
 (83) a. ? She blinked her eyes.
 b. She blinked her big blue eyes. Langacker(1991,1999)

このように、az.を言語化する際には、何らかの有意な情報価値を含んでなければならない。遊離数量詞も az.-spec.であるから、同様のことが言える。

- (84) a. 5個のリンゴを3個食べた。
 b. ?5個のリンゴを5個食べた。
 c. 5個のリンゴを〔5個全部／5個とも〕食べた。

上の(84a.)では、リンゴが5個存在している状況で、そのうち3つだけを食べたという<部分読み>の場合であるが、この場合の遊離数量詞は「食べたのは5個のうち3つだけ」という限定を

行っているため、十分に有意味な az.-spec.である。ところが＜全体読み＞である(84b.)の場合、遊離数量詞を用いるに際して特に有意味な動機があるわけではないので多少余剰に感じる。それを回避するためには、(84c.)のような更なる情報価値を付加することが必要である。

以上の議論からも分かるように、遊離数量詞は＜全体読み＞よりも＜部分読み＞の方が無標解釈であり、遊離数量詞の認知レベルの意味が az.-spec.であるということを考慮すれば自然に説明がつくことなのである。

5.4. 遊離数量詞の副詞性

さて、それでは次に遊離数量詞の文法的地位について考えてみよう。以下の例を見て欲しい。5.1.節と5.2.節でも見たように、連体数量詞は名詞を直接修飾するための要素であったが、遊離数量詞は名詞を直接修飾するための要素ではなく、「述語（イベント）レベルの az.-spec.」であった。

- (85) a. 400m のトラックを走った。
b. トラックを 400m 走った。

連体数量詞は、述語「走った」とは無関係に、「トラック」の属性について言及している。しかし(85b.)の遊離数量詞は「トラック」の属性について言及しているのではなく、「トラック」の中でも実際に「走った」部分について言及している。この意味において、遊離数量詞は述語と無関係に解釈することは出来ないのである。先行研究の多くは、ごく一部の文がパラフレーズできることに目を奪われる余り、遊離数量詞が連体数量詞と同じく名詞を修飾する要素であると勘違いしている。たしかに遊離数量詞も、名詞の数量的な側面を表してはいるものの、それは二次的な修飾であって、まず第一に述語との意味関係を優先しなければならない。次の例文(86)を見てほしい。遊離数量詞「400m」は、名詞の「トラック」を省略して「400m」だけを述語と共に使用することが可能である。ところが(87)の連体数量詞文では、被修飾名詞がないと文法的にさえ許されない文になってしまう。

- (86) (トラックを) 400km 走った。
(87) 400km の *(トラックを) 走った。

このことから、連体数量詞は被修飾名詞と決定的に結びついているが、遊離数量詞はそうでなく、むしろ述語と決定的に結びついているということが分かる。5.2.節でもすでに見たように、遊離数量詞は「述語（イベント）レベルの az.-spec.」であるから、述語と結びつけて初めての確に解釈されるのである。つまり連体数量詞と遊離数量詞は別々の部分を修飾しているのである。このことは、連体数量詞と遊離数量詞を同時に用いた以下の例文が分かりやすいであろう。

- (88) 「1000m のトラックを 400m 走った。」

「トラック」の全長は1つに決まっているから、それを「1000m」と「400m」の両方の数量詞が同時に修飾しているなどあり得ない。「1000m」とはトラックの全長について叙述しているから、名詞の「トラック」を修飾しているのは明らかに連体数量詞の方である。では遊離数量詞の「400m」は何について叙述しているのかというと、それは実際に走行した距離について叙述している。ゆえに「400m」は、「トラック」ではなくむしろ述語の「走った」と意味的に深く結

びついている。どれがどれを修飾しているのかを明らかにするためには、コピュラ文にしてみるとよく分かる。

【設定：「1000m のトラックを 400m 走った。」という例文(88)の状況において】

- (89) a. そのトラックは 1000m だ。
 b. *そのトラックは 400m だ。
 (90) a. *走ったのは 1000m だ。
 b. 走ったのは 400m だ。

以上からも分かるように、連体数量詞は名詞を修飾しているのだが、遊離数量詞はむしろ述語の「走った」を修飾していることは疑いない。この意味において、遊離数量詞は名詞に関する叙述を行う要素ではなく、むしろ述語（で表されている行為）について叙述するための要素なのだということになる。というわけで、名詞よりも述語と優先的に意味関係を結ぶからには、遊離数量詞の品詞は副詞ということになる。

遊離数量詞を副詞として扱うことは、多少奇異に感じられることもあるかもしれないが、以下の例文では、遊離数量詞の「一人」は明らかに状況を表す副詞である。

- (91) a. 十三四の女の子が一人石垣にもたれて、毛糸を編んでいた。(川端康成「雪国」: 75)
 b. 笑瓶さんはその様子を一人ぼつんと眺めていました。 (『ダウンタウンDX』から)
 (92) a. *一人の花子が泣いていた。
 b. 花子が一人泣いていた。
 (93) その少女は、一人淋しく泣いていた。

単独で「一人」を用いるよりも、例文(93)のように、「淋しく」を付加するとより副詞性が増すように思われる。しかし、このような状況を表す副詞として「一人」という表現はよく見られても「二人」や「三人」という数量詞が用いられている例は見られないので、単なる例外であると反論する者もいるかもしれない。

- (94) a. その少女は、一人泣いていた。
 b. ??その姉妹は、二人泣いていた。
 c. ??その姉妹は、三人泣いていた。

しかし思い出して欲しい。遊離数量詞は az.-spec.であるから、ただ単に数量を描写するだけの az.-spec.は余剰性が生じるため、何かしらの付加情報がなければ用いることはできなかった。状況を表す副詞として「一人」という az.-spec.が許されるのは、<たった一人だけ>という状況が<心細さ>や<もの悲しさ>という付加情報を有しているからであり、「二人」や「三人」にはそのような付加情報が感じられないために az.-spec.としては用いにくいのである。例文(93)で「一人」に「淋しく」を付加することでより副詞性が増すと感じられたのもこのためである。つまり、「淋しく」という表現が、「一人」という az.-spec.を用いる動機を明示的に強める働きをしているのである。

- (95) a. その少女は、一人泣いていた。
 b. その少女は、一人淋しく泣いていた。

ところで、遊離数量詞が副詞であるということは、語順も割と自由になるということである。以下の例を見れば分かるように、遊離数量詞の位置は述語の直前に限られない。

- (96) a. 彼女は チョコレートを 3個 買った。
 b. 彼女は 3個 チョコレートを 買った。
 c. 3個 彼女は チョコレートを 買った。
 d. ? 3個 昨日 彼女は チョコレートを 買った。¹⁸

ただし、被修飾名詞と遊離数量詞の位置を遠ざければ遠ざけるほど、容認度が下がってしまう。この原因は、参照点構造に起因する。遊離数量詞は、先行詞である名詞を参照点としたときのターゲット (az.) に相当する。(96)の例文でいうならば、「チョコレート」という概念が参照点であり、そのターゲット(az.)が「3個」なのである。ターゲットの同定は参照点を経由して為されるので、その2つの位置があまり離れすぎるのは好ましくなく、また<参照点→ターゲット>という語順を変えることも望ましくない。このような2つの制約は、人間の認知活動にとってごく自然かつ当然の制約である。¹⁹。(96b,c.)は参照点とターゲットの順序が逆になってはいるものの、その程度であれば柔軟性をもって解釈も可能であるが、(96d.)のようにあまりに離れ過ぎると参照点とターゲットの関係を認識しづらいため、容認度が下がるものと思われる。

遊離数量詞を副詞として扱うことは、伝統的な生成文法のような文法観からすれば奇異なことと思われるかもしれない。遊離数量詞は、形態的には名詞のように見えるし、(97a.)のように連体助詞の「の」をつけることも可能であるから、確かに名詞であることに疑いはない。

- (97) a. 1本の鉛筆を買った。
 b. 鉛筆を1本買った。
 (98) a. 1時間の{??本を読んだ/読書をした}。
 b. 本を1時間読んだ。

たしかに「1本」という数量詞は名詞と解釈しやすいが、(98)のように「1時間」の場合は、純粋な名詞と解釈しにくい。なぜなら、(98a.)で「1時間の本」とは言いづらいからである。この「1時間」という数量詞は、ある動作や行為が持続する時間を表す表現であるから、純粋に名詞を修飾する数量詞というわけではなく、むしろ潜在的には動作を修飾しているのである。よって「1時間の本」ではなく、「1時間の読書」というように被修飾語を行為名詞にしてやれば容認文となる。これは、「1時間」という数量詞が動作や行為を修飾していることを意味するものである。「1本」も「1時間」も共に形態的には名詞としての特徴を見せるのだが、意味的にはむ

¹⁸ 語順が割と自由ではあるといっても、どのような語順でも許されるわけではない。遊離数量詞と被修飾名詞が離れていると容認度が下がってしまう。Shimozaki(1989)は、このような条件を「隣接性の条件」と呼んでいる。

¹⁹ 参照点とターゲットの関係が一義的に解釈できないような曖昧な場合も存在する。以下の例では、ターゲットは「3人」という遊離数量詞であるが、どの名詞を参照点として経由しているかが曖昧である。(a)の例文ではより近接している「男子」であろうが、(b)の場合は発音するときのポーズによって決まる。さらに(c)のようになれば、判断が揺れるところであろう。このような参照点関係を同定する際の傾向に関しては、野村(1999)を参照されたい。

- (a) 女子が 男子を 3人 殴った。
 (b) 女子が 3人 男子を 殴った。
 (c) 3人 女子が 男子を 殴った。

しろ「1時間」は副詞として機能していることになる。つまり、意味を中心に考えるならば、数量詞の中には純粹に名詞的なものもあれば、副詞的なものもあるということである。つまり、形態的には名詞である語でも、副詞として転用される場合もあるということである。

ただし、名詞なら何でも副詞に転用できるわけではない。一般的には、以下のような<時>を表す名詞の場合が多い。²⁰

(99) 今日, 昨日, 今年, 来年, 今月, 来月, 今週, 来週, 朝, 夜, 以前, etc.

(100)a. {今日/昨日} の新聞。

b. {今日/昨日} 学校を休んだ。

例文(100)からもわかるように、(99)に挙げたような名詞は、(100b.)のように副詞としてもごく自然に用いられる。ただし、(101a.)のように動詞を修飾する副詞というよりは、むしろ(101b.)は文全体を修飾する文副詞というべきである。その違いは、コピュラ文にすればよく分かる。

(101)a. 健次は {ゆっくりと/はやく/一生懸命} そのトラックを走った。

b. 健次「は {今日/昨日/今朝/昨夜/先週} そのトラックを走った。

(102)a. *健次がそのトラックを走ったのは {ゆっくりと/はやく/一生懸命} だ。

b. 健次がそのトラックを走ったのは {今日/昨日/今朝/昨夜/先週} だ。

上の例からもわかるように、(102a.)ではコピュラ文にできないので、文全体を修飾する文副詞とは言えないが、<時>を表す名詞が副詞として用いられた場合には、(102b.)のようにコピュラ文にすることができる。このことは、<時の副詞>がイベントを修飾していることを意味している。<時の副詞>は、イベントを時のスケール上に位置付けるという意味で、文副詞として機能するのである。

(103) 健次は 昨日 そのトラックを走った。

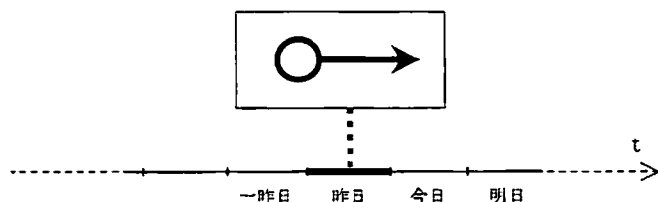


図 11

<時>を表す名詞が文副詞として転用されやすい理由は簡単である。それはある種のスケールを意味するからである。スケールといえば、認知文法では形容詞をスケールと関連づけて捉える

²⁰ 逆に、副詞が名詞として用いられることもある。以下の例は、本来ならば副詞とみなされる前置詞句が臨時的に主語、つまり名詞句として用いられている例である。従来の統語理論とは違い、認知言語学ではこのような現象を“例外”として扱わず、むしろ人間の認知能力に基づいた操作が顕著に現れた好例と考える。

(i) *Beside the fire is warmer.* Langacker (1997)

(ii) *Under the bed is a nice place to hide.* 坪井 (1990)

ことが多いが、実は副詞も同じくスケールと関連づけて捉えられることが多い。²¹ 上に示した図 11 の「昨日」にしても、これは日々過ぎてゆく時間の流れが 1 つのスケールとして認識され、そのスケール上にイベントを位置付けているのである。そしてこのスケールという概念は、なにも<時>だけに限られるわけではなく、<数>もスケールと密接な関係のある概念である。考えてみれば当然のことである。<時>を表すのに<数>の概念を使用している例が圧倒的に多い。次の(104)のような例は、<時>を表す名詞であると同時に、数字をも含んでいるため、一種の数量詞であるとも言える。

(104) 健次は買ったばかりの愛車で北陸自動車道を 3 時間走った。

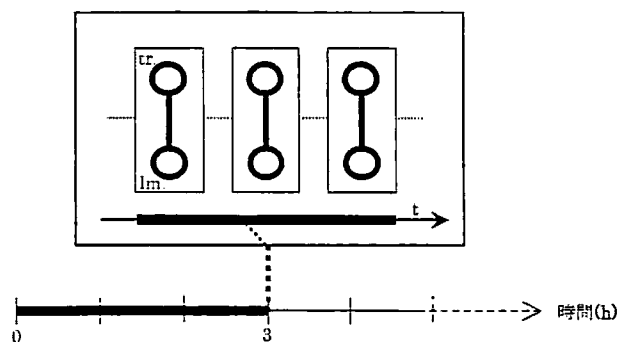


図 12

この例の場合も、「買ったばかりの愛車で北陸自動車道を走る」というイベントが、<時間>というスケール上に位置づけられており、そのイベントが「3 時間」継続したことを意味している。さらには、<時の副詞>ではない数量詞も、同様にスケール概念で考えることができる。次の例では、走行距離が「300km」に達するまで、「買ったばかりの愛車で北陸自動車道を走る」というイベントが継続したことを意味する。例文(104)の場合と唯一違う点は、それが<時間>のスケールではなく<距離>のスケール上に置かれている点のみである。

(105) 健次は買ったばかりの愛車で北陸自動車道を 300km 走った。

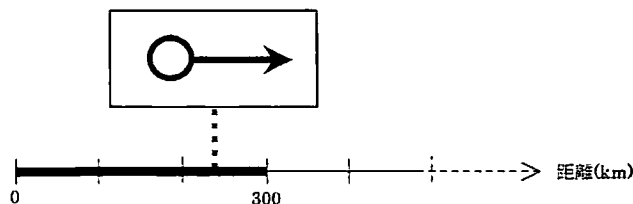


図 13

以上の例からも分かるように、<時>を表す名詞と同様にスケールの概念に基づく<数>の概

²¹ 英語では形容詞と副詞が同一の形態をしている hard などの例もあるように、これらは非常に近い概念である。

念は、ごく自然に副詞として転用されやすいのである。そもそも先行研究の移動分析では、連体格と同格のどちらから移動させるにせよ、なぜ数量詞だけが移動できるのかという理由が述べられていなかった。数量詞以外の要素はなぜ移動できないのか？ この点は、どの先行研究でも触れられていない盲点である。以下の例文は、(106)では連体格の名詞、(107)では同格の名詞をそれぞれ遊離させたものであるが、どちらも非文である。

- (106) a. アメリカ大統領のビル・クリントンが 声明を発表した。
 b. *ビル・クリントンが アメリカ大統領 声明を発表した。
 (107) a. アメリカ大統領 ビル・クリントンが 声明を発表した。
 b. *ビル・クリントンが アメリカ大統領 声明を発表した。

なぜ数量詞以外の要素は移動できないのか？ この理由は簡単である。例えば上例中の「ビル・クリントン」や「アメリカ大統領」といった名詞は、〈時〉〈距離〉〈数〉などの数量名詞とは違って、スケールの的に認知されるような概念ではないから、副詞として解釈できず、ゆえに遊離させることが出来ないのである。

遊離数量詞が副詞として機能しているとはいっても、やはり中には副詞らしく見えないものも存在する。中でも、〈時〉や〈距離〉を表すものが副詞性も高いのに対し、以下のように単なる〈個数〉を表すような遊離数量詞は、かなり副詞性が低いと思われる。

- (108) 鉛筆を3本買った。

一言に副詞といっても様々なものがあるのは当然で、どれもが同等の副詞らしさを有していると考え方が不自然である。副詞といえはく様態〉や〈程度〉を表すものが典型的と言えるかもしれないが、〈時〉〈距離〉〈個数〉へと行くに従って副詞性が低下してゆき、逆に名詞らしさが増してくるというグレイディエンスを成していると考えられる。

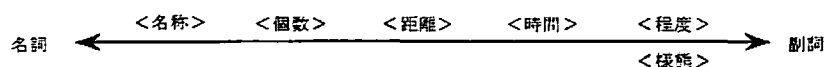


図 14

移動分析を行っている先行研究のほとんどは、〈個数〉の数量詞ばかりが扱われている。明らかに名詞である連体数量詞や同格数量詞と移動によって関係付けるためには、最も副詞らしさの乏しい〈個数〉の数量詞の方が都合が良いからである。〈距離〉〈時間〉など副詞性の高い名詞では、連体数量詞や同格数量詞と平行して扱いづらい（つまり、パラフレーズもしづらい）ので、そのような数量詞は避けているのである。しかし本稿のように遊離数量詞を名詞の副詞的用法として分析することで、そのような制限は考慮せずともよく、全ての遊離数量詞が図 14 のようにダイナミックなグレイディエンスを成しているものとして捉えることが可能となる。

副詞らしさという観点から見ると、特定数量詞よりも不特定数量詞の方が副詞性が高いと思われる。以下の(109a.)では、「ちょっと」と「たくさん」が連体格で（つまり名詞として）用いられているのに対し、(109b.)では遊離数量詞として（つまり副詞として）も用いられている。

- (109) a. ちょっとの油断／たくさん宿題 (名詞扱い)

b. 本をちょっと読んだ／宿題をたくさんやった

(副詞扱い)

「たくさん」の場合はそうでもないが、(109b.)の「ちょっと」場合、それが時間的に「ちょっと」なのか、それとも読んだページ数が「ちょっと」なのか曖昧であるため、＜時の副詞＞の一種として捉えられても不思議ではない。また、加藤(1997)も指摘していたように、不特定数量詞には価値判断が含まれている。この価値判断が＜程度＞の一種としてスケールの解釈とうまくマッチするため、副詞として解釈されやすいのであろう。次のような例文にすれば、＜程度の副詞＞らしさがよりハッキリと感じられる。

(110) {ちょっと／少し} ムカついた。

以上のように、＜程度＞などを表す典型的な副詞を中心として、＜時間＞＜距離＞＜数＞を表す数量名詞も副詞性のグレイディエンスを成す一員として捉えることが可能なのである。

5.5. 転移修飾としての遊離数量詞

さて、これまでの議論で、時を表す文副詞と同様に遊離数量詞も文副詞として機能していることが分かった。しかし、＜時＞を表す遊離数量詞であれば、文副詞としてイベントを修飾しているという考えも十分に想像しやすいであろうが、先の節でも見たように、＜距離＞や＜個数＞を表す遊離数量詞などは、遊離数量詞の中でも副詞性が低くなるため、文副詞ではなくやはり名詞で表されている物体の個数のみを修飾していると考える者もいるかもしれない。

(111) 健次は北陸自動車道を [az.-spec. 300km] 走った。

上の(111)の場合、通常ならば「健次」が tr., 「北陸自動車道を」が lm.としてプロファイルされているのだが、実際は「北陸自動車道」という名詞によって指示される道路を全て走行したとは限らず、「北陸自動車道」の中でも実際に走行した部分は az.として解釈されており、それを数量的に換算して言語化しているのが az.-spec.としての遊離数量詞なのである。

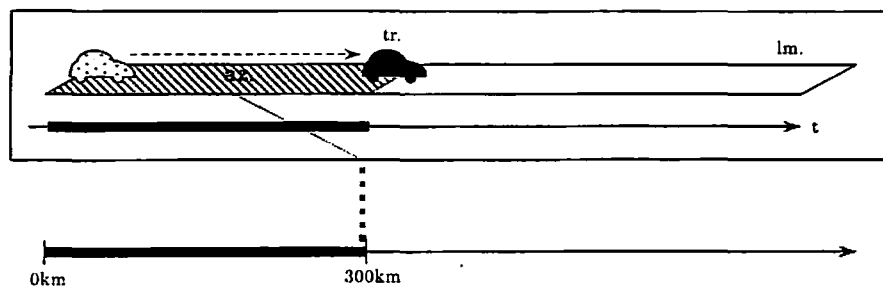


図 15

このとき、「健次が北陸自動車道を走る」というイベントが、「300km」という距離に達するまで継続したのであるから、＜距離＞のスケールが「300km」までプロファイルされており、イベントはそのスケール上に位置付けられる。この意味に於いて遊離数量詞は文副詞なのであるが、実際に「300km」というのは、名詞の「北陸自動車道」のうち実際に走行した部分 (az.) を指

しているとも解釈できる。つまり、遊離数量詞「300km」は、文副詞としてイベントを修飾しつつも、「北陸自動車道」という名詞の az.をも指しているのである。このような現象は、いわゆる転移修飾の一種と考えられる。転移修飾とは、例えば以下のようなものである。

- (112) a. 男は、疲れた夜道をとぼとぼと帰った。 (山梨 1995: 179)
b. 父には今夜ほどうれしい日はなかった。

上例の「疲れた」は形式的には「夜道」を修飾しているのだが、実際に疲れているのは「男」である。また「うれしい」も、形式的には「日」を修飾しているのだが、実際に嬉しい気分になっているのは「父」である。このように、形式的な修飾と意味的な修飾の間に不一致が生じているわけである。このような現象を転移修飾と呼ぶのだが、よく指摘されるこれらの例は<名詞>から<名詞>へ修飾が転移している例である。メトニミーという視点から捉えるならば、近接関係に基づくメトニミーということになる。しかし遊離数量詞による転移修飾は、<名詞>から<名詞>へ転移するのではなく、<イベント>からその参与者である<名詞>へ転移する。メトニミーという視点から捉えるならば、遊離数量詞とは<全体>で<部分>を表すメトニミーということになる。

<距離>よりもさらに副詞性の下がる<個数>の遊離数量詞を見てみよう。もし連体数量詞であれば、加藤(1997)も指摘しているように、集合認知が反映されているのでリングが3個のパックなどで売られているような状況であるが、(113b.)のように遊離数量詞が用いられている場合は、ばら売りされているような状況を反映していた。

- (113) a. 健次は青果店で リンゴを 買った。
b. 健次は青果店で リンゴを 3個 買った。

このように遊離数量詞を用いた場合は、ばら売りのような状況であるから、買い物をした青果店には当然3個以上のリンゴが売られていることが前提となり、その中から3個を買ったことになる。しかし(113a.)のようにただ単に「リンゴを買った」と言った場合、まさかその青果店に売られているリンゴを全て買ったと解釈する者はいないであろう。確かに店頭には20個なり30個は置かれているはずであり、単に「リンゴ」をプロファイルするだけでは、それら全てがプロファイルの対象となってしまう。しかし実際に買ったリンゴは、その中の一部だけであるから、そこだけが az.となっている。ゆえに(113a.)を図示すると以下ようになる。

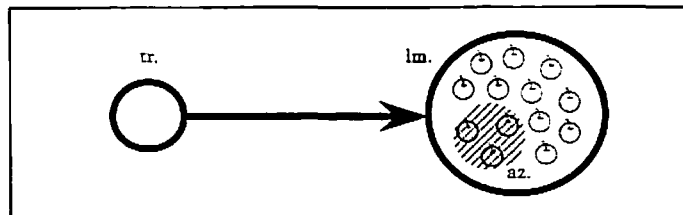


図 16

しかし(113a.)のように言うだけでは、実際に買ったリンゴ (つまり az.となってるリンゴ) がどれだけ存在するのか明示されてない。それを明示化するために用いられる要素こそ、(113b.)の

ような遊離数量詞である。(113b.)では、リンゴが多数売られている状況で、1つ1つ手に取ってゆき、最終的に3個を買ったことが表されている。遊離数量詞の「3個」は、形式的にはイベントを修飾する文副詞として用いられてはいるが、実際にはプロファイルされている「リンゴ」の中でも az.になっている部分を意味的に修飾するという一種の転移修飾になっている。これを図示すると以下ようになる。

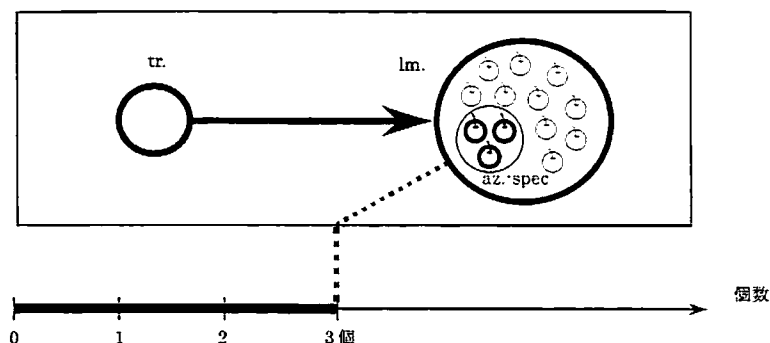


図 17

基本的には、図 17 に文副詞として機能する遊離数量詞「3個」が表すスケールを加えただけの図である。このスケールの「3個」の部分までがプロファイルされており、それがイベントを修飾している。しかし意味的には、名詞「リンゴ」によってプロファイルされている店頭に並んでいたリンゴの中でも、実際に「買った」という行為の対象になったリンゴのみを修飾していると考えられる。イベントを修飾することで、そのイベントの参与体の az.になっている部分へと修飾が転移しているわけである。

当然のことながら、連体数量詞文にはこのような修飾の転移は存在しない。例えば以下の連体数量詞文では、数量詞「3個」は参照点としてターゲットの「リンゴ」という名詞を直接に修飾しており、形式的な修飾と意味的な修飾に不一致は生じていない。

(114) 健次は青果店で 3 個のリンゴを買った。

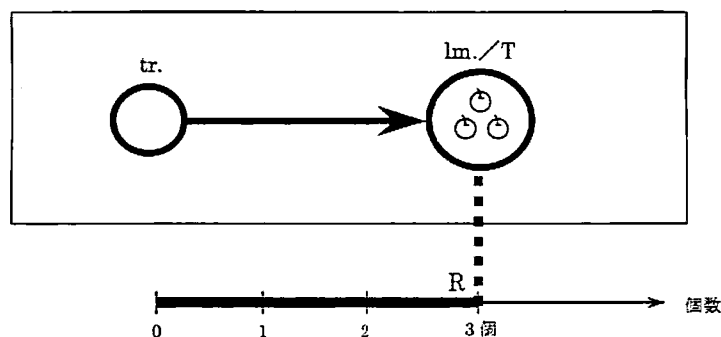


図 18

このように、連体数量詞ならば修飾関係に不一致は生じない。しかし遊離数量詞は、その機能が az.-spec. である。az. とはプロファイルの不一致があるところに生じるものであるから、当然のことながら遊離数量詞にもプロファイルの不一致が生じていることは想像に難くない。遊離数量詞は、一見したところ連体数量詞と同じく名詞を直接的に修飾しているように見えるが、じつは文副詞としてイベントを修飾しており、そのイベントを経由して二次的に名詞を修飾しているのである。そしてこのような修飾関係の不一致は、これまで転移修飾として指摘されてきた現象の一種なのである。

5.6. 格の制約について

2 節でも見たように、数量詞が遊離できるのは主語や目的語からのみという制約があった。先行研究では、これをただ単に制約として設けているだけで、なぜそのような制約が生じるのかという説明は一切されてこなかったが、本稿で提案している az.-spec. 分析では、この点が自然に説明できる。前節でも見たように、遊離数量詞の az.-spec. は一種の転移修飾である。遊離数量詞は文副詞としてイベントを修飾すると同時に、そのイベント内の参与体の az.-spec. でもあった。つまり、遊離数量詞による修飾は、イベントを経由してそのイベント内の参与体 (の az.) へと転移しているわけである。つまり遊離数量詞に対する格の制約とは、移動に対する制約ではなく、実はこの転移に対する制約なのである。修飾の転移先は無条件にどこでもよいというのではない。イベントを経由した後で修飾が転移しやすい先は、そのイベントの中でも特に述語と直接的な関係を結んでいるものに限られる。そもそも az. とは、述語で表されている行為と直接的に関わっている部分のことである。ゆえに、述語が表す行為と直接的に関係している参与体でなければ az. は生じない。そしてこの「述語が表す行為と直接的に関係している参与体」というのは、「主語」と「目的語」に他ならないのである。

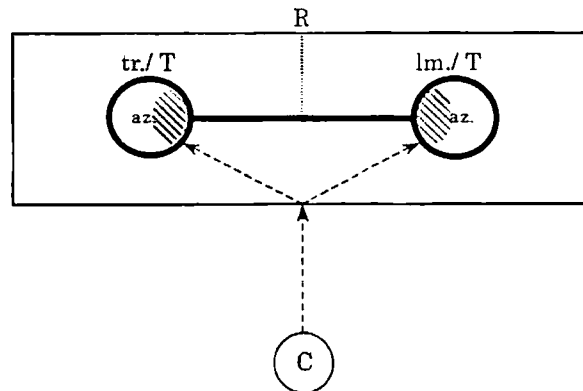


図 19

言うまでもないことであるが、＜イベント＞とは述語で表される事態のことである。「述語が表す行為と直接的に関係している参与体」というのは、言い換えるならば、「イベントの中心的な参与体」ということになる。そしてこれは、認知文法では primary figure (trajector) の「主語」と secondary figure (landmark) の「目的語」に相当する。イベントを構成する参与体は、なにも2つとは限らない。当然のことながらいくつもの参与体 (参与者) がイベントの成立に参加している。その中で一番高い際立ちをもって認知された対象が tr. であり、次いで際立ってい

ると認知された対象が *lm.* となる。それゆえ、イベントを参照点として経由した後のターゲットとしてアクセスしやすい（図 20 参照）。しかし当然のことながら、*tr.* や *lm.* 以外にも 3 番目、4 番目、5 番目..... の際立ちを持つ参与体もイベントの中には存在するのだが、これらは明らかに *tr.* や *lm.* よりも際立ちが劣るため、イベントという参照点を経由した場合、それらにアクセスするのが困難になるのである。

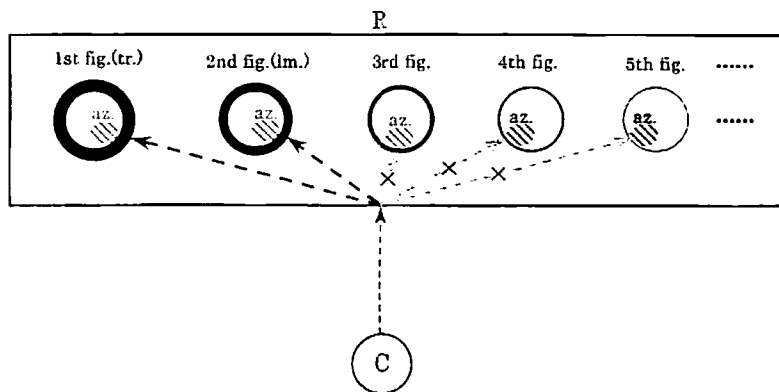


図 20

遊離数量詞はイベントを参照点として経由して、その中の参与体（の *az.*）をターゲットとするため、自然と際立ちの高い参与体がターゲットに選ばれやすくなる。参与体の *az.* にアクセスするとき、際立ちの低い参与体だとアクセスしづらいからである。このように、数量詞遊離がなぜ主語と目的語にしか許されないのかという疑問は、遊離数量詞が *az.-spec.*（もしくは転移修飾）であるという事実から自然に説明がつく問題なのである。

このように、イベントを参照点とした場合に、イベント内の *tr.* や *lm.* が優先的にターゲットとして選択されるという現象は、なにも遊離数量詞文だけに限られるわけではない。日本語の主要部内在型関係節（Head Internal Relative）にも、同じような現象が見られる（野村 1999）。以下の例文のように、目的語(115a.)や主語(115b.)の場合は許されるのだが、デ格やカラ格は許されない。²²

- (115) a. みかんが裏庭でとれたのを、家族そろって食べた。（野村 1997）
 b. 昨夜から雪が降っていたのが、今朝 1 メートルほど積もっていた。
 c. *太郎はテーブルにナイフが置いてあったので林檎を剥いた。
 d. *友人が留学しているのから手紙が来た。

素洋舞内在型関係節も遊離数量詞文と同じように、イベントを参照点としているために、そのイベント内でも際立ちが高いと認知されている *tr.* や *lm.* がターゲットとして選択されやすいとい

²² 遊離数量詞と主要部内在型関係節の類似点はこれだけではない。どちらもイベントを参照点として、その中の参与体をターゲットとするため、主要部内在型関係節においても遊離数量詞文のような *az.-spec.* が可能なのである。特に注目してほしいのは、(a)の方である。なぜなら、*az.-spec.* として数量詞が使われているからである。

(a) 太郎は猫がネズミを追いかけているのを [二匹とも] 捕まえた。（Ohara 1996）

(b) 暴漢は久美子さんが逃げようとするのを、鉄パイプのようなもので力まかせに[彼女を] 殴って死亡させたらしい。（三原 1994）

う特徴が両方に見られることは当然のことである。

5.7. 連続的認知 (sequential scanning) を反映する遊離数量詞

さて、最後になってしまったが、この節では遊離数量詞と連体数量詞の認知的機能について論じる。とくに以下の2点を主張する。

遊離数量詞は sequential scanning を反映している。
連体数量詞は summary scanning を反映している。

遊離数量詞は述語で表されたイベントを参照点としその中の *az.* の部分を修飾しているのはこれまで見てきた通りであるが、述語で表されたイベントというものには、Langacker も指摘しているように、時間的な側面が不可欠である。たとえば以下の例文も、一般にはパラフレーズの関係にあるとされるが、話者の状況認知の違いが反映されている。

(116) a. He fell.

b. He took a fall.

Langacker(1987:146)

これらの文によって描写されている状況は、客観的には同一の事象であるが、(116a.)の表現では、問題の事象を時間軸にそった連続的な過程からなる事象として捉えたことが反映されている。ところが(116b.)の表現では、時間的な側面は捨象され、その事態を一括的に捉えたことが反映されているため *a fall* という名詞で表現される。²³ これらの違いを図示すると、前者は図 21(a.)、後者は図 21(b.)のようになる。Langacker(1991:80)は、前者を連続的スキャンニング (sequential scanning)、後者を一括的スキャンニング(summary scanning)と呼んで区別している。

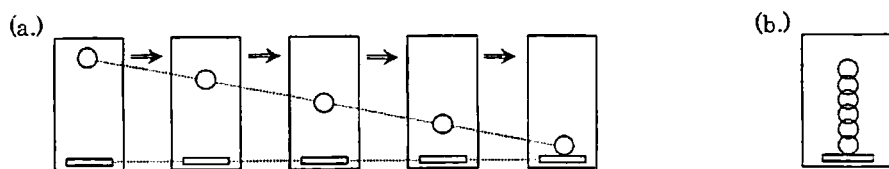


図 21

Langacker(1987:144)

これは、単に品詞が違うという問題ではなく、話者が状況をいかに認知、もしくは把握しているのかを示すものであり、その認知の違いが品詞の違いとなって現れたのである。

遊離数量詞は、この連続スキャンニングを反映していることが多い。例えば以下の例文を見てほしい。(117a.)の例文はアイコン性が言語に反映された例として山梨(1995:130)で紹介されている例文であるが、注目してほしいのは、ここに遊離数量詞が使われているということである。

²³ 池上(1981)で提唱されている「モノ」的認知と「コト」的認知の違いに相当すると言ってもよいであろう。

- (117) a. あ、鳥が一羽、二羽、三羽、飛んできた！（山梨 1995：130）
 b. *あ、鳥一羽、二羽、三羽が 飛んできた！
 c. *あ、一羽の、二羽の、三羽の鳥が 飛んできた！

何かの事象をリアルタイムで描写する場合、すべてを同時に認知・言語化することは不可能であるため、そこにはどうしても認知・言語化の＜順序＞が生じてしまう。何らかの物体とそ物体の数量的側面を認知する場合、まず最初にその物体が何であるかという identification の認知が優先され、その物体の数量的側面（つまり個数）が後回しにされるということは、人間の認知活動として至極自然なことである。その物体が何なのか分からないまま数を数えるというのは考えにくい。また、＜個数＞は、一瞬で全て認知するのは困難であり、ほとんどの場合は「1」から始まり、「2」、「3」……という具合に順番かつ連続的に認知ゆく場合が多く、例文(117)でも同様の認知が為されているのである（下図 22 参照）。

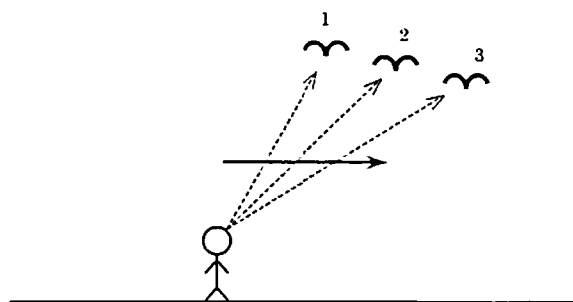


図 22

例文(117)のように、飛んできた鳥の数を数えるという場合は、連続スキニングの認知プロセスが必要不可欠である。最初に飛んでいる対象が「鳥」であることを認識した後で、その「鳥」が何羽いるのかを認知する。その際には、やはり「1」「2」「3」……という具合に連続スキニングが必要不可欠である。3羽や4羽であれば一瞬で認知できるかもしれないが、もし10～12羽くらいであれば、それが10羽なのか、それとも11羽なのかを一瞬でカウントするのは常人には大変困難である。前提知識として何羽存在するのかを事前に知っている場合を除けば、やはり「1」から順に連続的スキニングを実行する（つまり、カウントしていく）しかかない。²⁴ その認知ストラテジーを忠実に反映する言語表現こそ、(117a.)のような遊離数量詞表現であり、(117b.)や(117c.)のような同格数量詞や遊離数量詞は用いられない。逆に、(117c.)のような連体数量詞は一括スキニングを反映するのであるが、その前に遊離数量詞による連続スキニングの例を今少し見ておこう。上のような例文以外でも、遊離数量詞が連続スキニングを反映していることを示す例には事欠かない。例文(118)は、眠れない場合に使われる手法の1つで、誰もが知っている有名なフレーズである。1匹ずつ次々に羊が現れるという典型的な連続スキニングの一例であり、やはりここでも遊離数量詞が用いられる。

²⁴ ゆえに、遊離数量詞は未認知のものを認知（つまり、カウント）してゆく際に使用されることが多くなる。つまり、新情報である場合が多い。一方で連体数量詞は、数量的側面が既に認知されている対象に対して使用されることが多く、つまりは既知情報（旧情報）扱いになることが多い。

- (118) a. 羊が一匹、羊が二匹、羊が三匹……
 b. *一匹の羊, 二匹の羊, 三匹の羊……

これは羊が一匹ずつ順番に現れる場面を描写したものであり、眠りに落ちるまでこの連続的スキヤニングが続けられる。一匹ずつ順番に羊が出てくるので、一括スキヤニングは物理的に不可能である。また、眠りに落ちるまでに羊を何匹まで数えればいいのか不明であるから、やはり一括スキヤニングは不可能である。このような例は、連続スキヤニングと一括スキヤニングの違いを如実に反映している好例といえる。さらに次の例でも、同様のことが見られる。

- (119) a. 延長戦を5分戦ったところで雨が降ってきた。
 b. 5分の延長戦を戦ったところで雨が降ってきた。

遊離数量詞文である(119a.)の無標解釈は、延長戦が5分以上あって、その途中で雨が降りだしたというものであろう。つまり、スキヤニングが延長戦開始5分の時点で一時停止しているのである。これを図示すると以下ようになる。

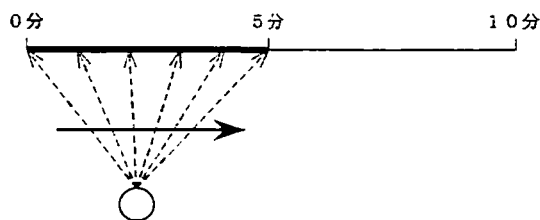


図 23

ところが連体数量詞文である(119b.)の無標の解釈は、延長戦は5分しかなく、その延長戦が5分全て終了した時に雨が降りだしたというものであろう。このような解釈が生じるのは、連体数量詞が一括スキヤニングを反映しているためである。一括スキヤニングをした結果が「5分」なのだから、それが延長戦の全てであり、それ以上の時間は存在しないという含意が生じるからである。

さらに次の例文(120)は、部屋の中の状況を1つ1つ認知して描写してゆく場面であるが、ここでもやはり遊離数量詞が用いられている。

- (120) 山本太郎の部屋は六畳の洋室である。一隅にタンスがつくりつけてあって、中に背広が一着と、ふざけたネクタイが、二、三本つるしてある。(曾野綾子「太郎物語」: 40)

この例では、語り手が読者の視点、つまりこの部屋を初めて認知する読者の視点と同一化してナレーションが行われている。部屋を見回したとき、まず最初に「タンス」が認知され、次にそのタンスの中にある「背広」から「ネクタイ」へという具合に連続的スキヤニングが行われているのだが、それと同時に、「背広」は「一着」、「ネクタイ」は「二、三本」というような数量的な側面に関しても連続的なスキヤニングが為されている。

以上の議論から、やはり遊離数量詞が連続スキヤニングを、連体数量詞が一括スキヤニングを

反映しているということが分かるであろう。²⁵

6. おわりに

本稿では、従来「数量詞遊離」と呼ばれてきた現象について考察してきた。本稿で主張したことは、(1) 連体数量詞と遊離数量詞は全くことなる認知を反映するための要素であり、これらを移動によって関連づけることは出来ない、(2) 連体数量詞はターゲット名詞を identify する際の認知的手掛かり、つまり参照点として機能している、(3) 遊離数量詞は名詞の副詞的な用法であり、動詞を修飾しているが、一種の転移修飾としてそのイベント内の活性領域 (active-zone) を叙述している、(4) 数量詞は名詞性の高いものと副詞性の高いものがグレイディエンスを成している、(5) 連体数量詞は一括スキニングを反映し、遊離数量詞は連続スキニングを反映している、という5つである。

参考文献

- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions a constructional grammar approach to argument structure*. The University of Chicago Press.
- 井上和子 1978. 『日本語の文法規則』 東京：大修館書店
- 神尾昭雄 1977. 「数量詞のシンタックスー日本語の変形をめぐる論議への一資料」 『言語』 Vol.6, No.8, pp.83-91.
- 加藤重広 1997. 「日本語の連体数量詞と遊離数量詞の分析」『富山大学人文学部紀要』 No.26, pp.31-64.
- 小熊 猛 2000. 「同一指示の参照点・標的交替」『石川工業高等専門学校紀要』 No.32, pp.111-121.
- 国広哲弥 1980. 『日英語比較講座 第二巻 文法』 東京：大修館書店
- Langacker, Ronald W. 1984. Active-zones. *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. Vol.10, pp.172-188.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. Reference-point Construction. *Cognitive Linguistics*. Vol.4., pp.1-38.
- Langacker, Ronald W. 1995. Raising and Transparency. *Language*. Vol.71, No.1, pp.1-62.
- Langacker, Ronald W. 1997. Dynamic Conceptualization. Lecture given at University of Tokyo on Aug. 6th, 1997.

²⁵ 連体数量詞が一括スキニングを反映しているという事実は、加藤(1997)が「連体数量詞が集合的認知を反映している」と主張しているのに通じるものである。

- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 三原健一 1994. 「いわゆる主要部内在型関係節について」『日本語学』Vol.13, No.7, pp80-92.
- Muraki, M. 1974. *Presupposition and Thematization*. Tokyo: Kaitakusha.
- 中村芳久 1997. 「認知的言語分析の核心」, 『金沢大学文学部論集 言語・文学編』 No.17, pp.25-43.
- 中村芳久 1998. 「認知類型論の試み: 際立ち vs. 参照点」 *KLS*. Vol.18, pp.252-62.
- 野村益寛 1996. Aspects of the Japanese Internally-headed Relative Clause Construction: From the Viewpoint of Cognitive Grammar. 日本英語学会ワークショップ口頭発表資料.
- Nomura, Masuhiro 1997. On the Relevancy Condition of the Japanese Internally-Headed Relative Clause Construction. 『日本女子大学文学部紀要』 Vol.46. pp.91-113.
- 尾谷昌則 1998a. 「構文の拡張とその動機付けに関する認知論的研究 - 日本語の主要部内在型関係節について」 富山大学修士論文
- 尾谷昌則 1998b. 「格助詞「の」の認知プロセス」, 『言語科学論集』, Vol.4, pp.16-33.
- 尾谷昌則 1999. 「Active-Zone としての数量詞遊離」 第2回認知言語学フォーラム ワークショップ口頭発表資料
- Ohara, Kyoko Hirose 1996. *A Constructional Approach to Japanese Internally Headed Relativization*. Ph.D Dissertation. University of California, Berkley.
- 奥津敏一郎 1969. 「数量的表現の文法」 『日本語教育』 Vol.14.
- 奥津敏一郎 1974. 『生成日本文法論』 東京: 大修館書店.
- 奥津敏一郎 1996a. 「連体即連用 数量詞移動 その一」『日本語学』 Vol.15, No.1, pp.112-119.
- 奥津敏一郎 1996b. 「連体即連用 数量詞移動 その二」『日本語学』 Vol.15, No.2, pp.95-105.
- Shibatani, Masayoshi 1977. Grammatical Relations and Surface Cases. *Language* 53-4.
- 柴谷方良 1978. 『日本語の分析』大修館書店
- Shimozaki, M. 1989. The Quantifier Float Construction in Japanese. *Gengo Kenkyu*. Vol.95
- Talmy, Leonard 1978. "Figure and Ground in Complex Sentences", Joseph Greenberg(ed.), *Universals of Human Language: Syntax*, vol.4. Stanford, CA: Stanford University Press.
- 高水 徹 1999. 「日本語の量・程度表現に関する認知言語学的分析」 京都大学修士論文
- 坪井栄治郎 1990. 「『前置詞句主語』と主語に対する範疇の指定」『電気通信大学紀要』 第3巻 第1号 pp.173-182.
- 山梨正明 1995. 『認知文法論』 東京: ひつじ書房